

Address of 12.

NATIONAL Month of **NATIONAL**

July 15 and August

- 1931 -

No. 3758

龍石丸

高知の三郎

鶴也

山根

本見

朝高

獨逸

三那

私

火車

日

夕

上

評

方

七

能

疾

柱

月

七

龍

石

丸

龍石丸

柱

紅

黄

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

中

1931年七月十五日

此記は主として感激或は感
動し尤もことと書し尤も也

讓佐は十四才と七ヶ月、妻声

期に達し、體量百二十斤、

また尺曲は、此の我はハイスクール

二年を修了し、此の我、悪

戯感、情平山成り、の時

と存せん。此の人々の借等、此

人の居るを、何か、善くあらせらる

こと、此の我、此の書、此の、此

讓佐の事、此の、此の、此の

此の、此の、此の、此の、此の

と、此の時、此の、此の、此の

此の、此の、此の、此の、此の

。まの人は、子供用志の事、親

。子の^{きょうが}実家^{じけ}の^お跡^{あと}の^い。日中

たごひは見えぬ。親も庶

。チヤレソレと云ふ、親は自らの事。

の^お舞^まの^いは女^にし^て丸^は何^をお

し^てお^もう^る。お^もう^る、親^は遠^く。

の^おみ^が、自^らの^事を^戒め^て他

人の^事を^借には^言及^しま^い。然

るに、まの口人は、吾等^は天^をま^り

に他人の^事を^借と^言ふ^事、書

し^ては、其^の事^を引^きず^り先

方の親^を遠^くの^事に^行て、^お私

麿^の声^を振^りて、言^ふの^に、お私

の^事を^借は、おん^にて^おぬ^のに、^お私

の^事を^借は、おん^にて^おぬ^のに、^お私

め^るの^事。おん^にて^おぬ^のに、^お私

に^おん^にて^おぬ^のに、^お私

に空見ゆらぐのた。午後おろしやい

とさくらやういふ世からたひ。』と、

『これは、まことにお気のまゝなり、

ふ借るさう取めしこ、この位、

しうことのないやうに致しませます。』

と詫びるやうに西の函子に

先づきの事は、[『]金勝手ちやう、と

意気揚々としておで行動おんと

するま。[』]『一寸お申し、結果

は、何は先わか耳きくす、んか

状より書存御は、ちんちん

如、私より借らしこと、』お

耳きくをさら

『私は何侍と表と通る」と

支那人と評ひする

若しと支那人と評ひすること

止ますた、たは、横らと

止ますた、たは、横らと

ありたるとまると、
「道さし、月懐

とと、
「長馬」

「市」
「美」

「入」
「丸」

「の」
「三」

「貸」
「十」

「う」
「八」

「う」
「十」

「煙」
「十」

「う」
「十」

「等」
「十」

「先」
「十」

「時」
「十」

「と」
「十」

「と」
「十」

「斗」
「十」

「賢」
「十」

たしむしすい。その時あは穰花は

穰のまの供(田子) ^御 _{まじり} 三ノ中

と先に進んじめる。スカウトの

平知んスカウト、じまうは、^最下

穰に居るとその娘ま、まじり

時々、まじり来る

田子持たうその供あ、まじり

一た。B

田 あれうその供と花のあはれる

田 穰に居るまじり、

田 新まの供を信せしん。

田 穰のまの供を信せしん、

田 朝七時、まじり、

田 日午のまの供、何と

田 あいとまのまの供、

田 まじり、穰の顔、

田 穰の顔、

田 穰の顔、

たふ、横に北まきかき、横にうらみさ

その邦人めと、うらみの横にうらみの

ひす、と、うらみの横にうらみの

たふ

自分にはきんたことと、知れなかつ

たふ、と、横にうらみの横にうらみの

うらみの横にうらみの

おれんと、うらみの横にうらみの

ひす。私は、私の横にうらみの

まきかき、うらみの横にうらみの

うらみの横にうらみの

と、うらみの横にうらみの

たふ、と、うらみの横にうらみの

たふ

うらみの横にうらみの

うらみの横にうらみの

たふ、下には、夫婦にうらみの

の衣襟のほつてある。裏は、紐の
のホテに、袴使をして飛ぶらん。さうかん。
病気のため、おの中の移候し、たの
か、約た、甲乙の事。さうすう、俱
集部、のう、ター、三年、ほど、やうに
辰、た、う、ん、か、書、得、ま、部、か、さ、う
この一部に、移候し、か、う、解、備
さ、水、ん、さ、お、か、う、さ、う、ん、の、所、事、得、ま、
ご、料、理、と、ん、の、事、り、や、夜、の、掃、除
た、と、さ、う、ん、さ、う、ん、さ、う、ん、さ、う、ん、
また、解、備、さ、れ、た、書、得、ま、さ、う、
このア、ト、ケ、ト、に、煙、草、屋、靴、磨、
き、の、所、と、さ、う、ん、さ、う、ん、さ、う、ん、
お、ん、朝、は、七、時、ん、さ、う、ん、さ、う、ん、
候、も、う、夜、の、事、一、時、事、病、ん、の、
解、候、ま、う、ん、さ、う、ん、さ、う、ん、
抄、巻、の、し、り、行、と、う、あ、り、書、得、ま、

あらたごとくまこと通さし、月儀

とと居らん。また、長手

肺 莫うたのん、とと物する

まゝ有とらふび居らんのが、丸

のあかと思ふさし、ろ二七〇 書

貸返すこたうは、返すの十、二

う丸、月も有る。ハ十一、月

う借らす、沢け、ゆあ、あ、ほ、ん

煙ったらう。店から借るらう

うたふ、梅、耕、た、げ、り、い、あ、三

夢中母も、排、り、お、は、た、ら、ぬ、。

先、の、し、ま、れ、と、知、ら、ぬ、は、な、い、

時々、執、し、念、事、ま、ま、美、ら、し

とた、た、何、に、被、た、親、年、い、し

ととた、ら、あ、か、い、穽、治、あ、さ

牛、り、に、目、あ、ら、え、雲、獻、た、り、と

賢、し、さ、い、の、い、あ、ら、た、心、如

たしむしすい。その時あは穰は

穰のまの供(同4) ^穀 _{五ノ中}

と先に運んぬる。スカウトの

平かんすかうの心まうは、^母 _下

穰の居るとその娘ま、^ま _た

時々、まのうあ来る

と女あはうその供あ、^ま _ま

うた。B

とあはうその供とたのめとれるな。

と穰はあまの守^ま _ま ^ま _ま

と私をその供を運め^ま _ま

と私をその供を心^ま _ま

と朝七時^ま _ま ^ま _ま

と日^ま _ま

と日^ま _ま ^ま _ま

とあ^ま _ま ^ま _ま

とま^ま _ま ^ま _ま

堪まらぬもの、一團まるんちのせん。
る借の時代に、意気地なまじ、
やういは、成妻して、借勝者敗
の世中、まっせ行りたし。

。内地に居る旧女は、俗な、朝らする

ものし、野にさるもウレ、三風に流
禮をぢりて居るうん。それ、

自分には、痴をき、ハ、ハ、ハ、
人屋、甜ちゃん、山仲に、無事用散、

あすともな、類、類、と甘田入る
クみひちる。

。頭は、丸けり、よ、よ、は、饒ける。

頭、ま、ま、ま、饒、の、先、人、と、ち、ち、ち、
す、ろ、う、か、

讓治の流

。あ前あ千四年七月とくは、白布の
 にすはがモウ十六オ古ぞ。十六オと
 へは、まかへる者へは、や腹せねば
 せぬ年一古ぞ。この為め、元々の
 ためには一命を換つちて、殺しはね
 は、あかぬ年一古ぞ。これに、あ前は、
 近所の人から、あ句を言はせり
 アンハアラガム子供、おちと云はれ
 める、あもあ前は、近所の人、あ
 ころ、あはれるが、あまの、
 であるかた。あまの、あまの、
 あせ、あか、あは、あは、あは、
 ぬ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 供、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、

行おねは、たのたないうた。うん、うん、
積か、好こつて、イヤ、イヤ、イヤ、
ライ、ライ、ライ、ライ、ライ、ライ、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
と、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

表、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
ず、心、を、改、め、る、事、を、良、の、か、ら、中、と、な、れ、
た、か、た、れ、は、モ、ウ、お、お、お、お、お、お、お、お、
は、あ、い。今、日、限、り、に、家、を、あ、ら、わ、し、
ぬ、い、ぬ、う、子、車、を、決、り、な、し、を、持、
つ、た、の、は、雨、親、う、る、幸、と、な、り、
ぢ、や。ま、う、く、考、へ、て、る、事、を、し、
ぬ。

り、つ、ま、り、強、く、な、ら、な、い。
お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
一生、静、心、命、に、勉、励、し、て、お、か、の、は、

肺の八割にたまるやうな痰を

しきりも、ノトアツクと鏡、

ははあや、はい。 まん、
は

この日は、書と擔を、
は

つら。 あふれるの、
あ

親ら、あいか。 教、
鬼

神、
あ

か、
あ

。 ナ、
微

ア、
あ

あ、
あ

た、
は

行、
あ

妙、
あ

に、
あ

1931 七月二十九日 知 日未を流した。

女子の望む方、

一、録読の持ち上つた時に親の意思
見に「ニ」はし録ひますか、

一、鴉目夫と定めらるる中とては、ど
んな値の人と希望し、

も高麗所迄の廻り、

我を事者、中世の、上級生、百五

十名、この、題とあし、無記、

着、書と書、

百人
親の存存、
は絶対、

可憐、い、い、い、い、親、

環、上、ん、で、受、れ、る、環、

環、の、環、は、中、を、ん、

親の、系、通、し、

中二回、に、お、し、る、花、や、日、の、娘、

その際、しずくはめ程
理解のする人、

△感傷的の可なり男性、

この時、A、B、C等は、要求と表は
とあらん、其型は日本婦人の型
と認め、完全な世帯の女性は、
型の、そのものを要求と持たせ、
しずくは、
とあらん、
とあらん、
とあらん、

△感傷的、私は流着の一人、
とあらん、
とあらん、
とあらん、

△随分、
とあらん、
とあらん、
とあらん、

△その、
とあらん、
とあらん、
とあらん、

△替へ、
とあらん、
とあらん、
とあらん、

△あ、
とあらん、
とあらん、
とあらん、

草履竹治様

万葉 分七 1931

庫の自若き、漆多き、かたし九折板

老其まは、まの尻し、中片、尻り、至心

たし、鈴り、益し、作え、き丸、る、て、作

歸、何、と、色、を、由、承、け、り、謹、ん

ご、奉、慶、加、身、波、り、

鈕、亮、邦、報、し、程、し、せ、不、心、
itok

鮮、少、序、泣、息、獨、多、遠、の、記、行、へ、り

等、押、流、し、若、き、く、丸、の、押、流、し

古、之、は、オ、ピ、ア、ム、会、議、の、不、流、
び

咄、か、や、く、前、と、我、田、の、丸、の、禱、
あ、り、

載、敗、に、若、き、み、必、ん、り、あ、り、
獨

逸、人、の、心、事、た、り、の、如、
聖、不、疑

と、し、想、見、し、た、さ、北、
ら、う、し

と、其、を、し、か、う、先、
履、す、あ

や、う、に、用、心、せ、
得

すしん。誠にする。た。

在紐の同胞の中らひ、

吾等の如きも、位望あらず

し、ゴルフをねど、時

邦人のために作る。記

一才の書いしれなき。甚

い者にまゝに、自ら一

初意のたぬに、強は

に直敷頼のみす。と

歸臥す。此のまゝ。中

国を麗る。人格者は、

す。勤中静す。丸のたぬ

にた。刻誌。まやト

か。通。信。し。これ。の。む

前者の口を。自らの

知らぬ。後者は。自

系。柔。え。やう。とする

紳士。甚

響の響に 帝行ふささしをさうまう。

そこの私に けいせい せいせい せいせい

日会に先耳 後集の会長のち

るは是に老いの年 穰いある。君

しし 斯る会長 微くさば 熟

北に就てか 指 直事を求めん。

古く 五月 未日の 少うりすん。

柔の響に 事あるに 林あるは、少

と 慈心 善 孤 読に、 多の 徳を

未人の 友に 託して、 壽は氏

此に 天 鴨 井 末に 故を 求めん

少都 少すすん。

昔時 私の心の中は、 死し 厚し

春、 生きたるも 運命、 また 此

に 此に 水す 生きたるは 此れと

不 飢 饑 隠 始の 百に 呻 吟

すらのこ果は(何)命付り。と
歸せし居るんをうらまじさん。

待ついと二週百のち村妻殿

信しません。と
信しません。と

あけい、強左井出首完静三心

妙も来るるおんたりうすさん

心休むる層層のこたやい。と

声尋らるる、村妻はたう流し

トた。とたを講聴し飛す

大私には、あや、何うかたい。と

さん、すまな、と馬のよ

しお、感泣うた左村のし得

おせんやさん。

永田政広、四十三、Comet
This Garden 田壽吉

女馬すゑ、村妻は

草履さんには、羨しかういふ

備しぬちうたふ其後播磨の

中にこれ置しとれしと、まゝ元子の

にぬ赤さんに訊された。まゝいす。

何んとうに、慙隠の情に際し

あふりすよと嘆物に流

うやうやん。

草履さんと、ぬ赤さんと

稀に見る人権者。此等

堅き心、此流を直すとす

少其人、其の心とたよ。と私はい

ふら子に訊しぬちうたふと

有難候か、あ、た、

老直子の心、思、誼、に、お、し、

は、何とも、此流の言、事、の、あ

り、やうせん。ただ、涙とぬち、感

謝、し、

あ、

本國に私語一肉するは禁くし
直敷の鳳書は私語上
ヨリ夫、

来口が支那に干渉

来口が支那に干渉するに備
研はかやうにせしと干渉す

るのは、丁度、A社の来口の土
人イニテアに居るに
領事等は

夫、越の来口と白人は有集付
れと、たせ^りに居るか。何の権

和めようとする白人は領事と
殺せんとせんか、たせ^りに新

へ、来口政府を攻めぬれば
レも必要の支那と、先は接

助するに
は、たか、事には大少あり、

新 舊 坊の事 かくとすらんも。 瑤の 龍
之 雲 たる 新 たる 龍 物 なる。

支那の 支那

支那は 故 千 年 の 支 那 の 支 那 を 破 り けり
し、 支 那 主 義 と 基 礎 と 成 果
和 口 の 生 物 たる は 一 九 一 一 年 の こ
と なる。

支 那 龍 に 二 十 年 一 二 年 の 支 那
支 那 支 那 に 先 伏 す 心 なる 支 那
なる 支 那 なる。 支 那 支 那 支 那 支 那

支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那
支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那

支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那
支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那

支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那
支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那 支 那

かして飛ら、其は三三三封

利せしとすら、其の如し、

唐と其のは長の花の死する

ふか、ふかと其のは孝のたの

死するたのしむものほ生民四億

う中華のいれつものも存し。

仁存仁義の心まの、人情遠

徳の種敷しえには、その即と

除しと、とくにすかうあ、

多病、そのおは常きえすう今

のまるすの目やは董命とて

このは幾とすうたか、強と殺

さのし詩、とて来た、強と旅

五の才人と其の厚、とすうた

故に、は清氣、年いには其の腐

成せられ、露西並と同盤、

且中、のつらとユウと計在

たの西院西世も抄破られ、今月

四隣に頼む隙口は存し

未口と詠し之。由事と共と人

とよむら 紹季の心純く、たん

とよし 傳ししことひまふら

斯るまよふは天と許さず

地と許さずしひさる。然る二十

年と三十年と同一事と操

とよむと居るに、民はまきし

穂の慶しむ仕舞うらむらむら

口長、夕天、るる、共、あ、け、り、

秋口は一王、あ、ま、の、ひ、

鶴見 秋命とよむは後孫秋年

とよむの事、人の智、わ、お、ん、

予しと紹季は、た、子、と、よ、み、自、給、

名、詞、之、用、ゆ、る、を、遊、牛、と、よ、み、お、ん、

マルクス・ポーター、ヘンゲル・ガール

かゝる方向なる場へ在紐の形

人中には、マルクス・ポーターや、ヘンゲル・ガール

といふ青年男女ありて、民族を元

展と云、^つカ成るとい、君恩と云

よとうは、^其毫末の境へは、^いづ

多量の心頭へ在り。飽きかゝり

在りて、^いづるに、^いづるに、^いづるに

と、^いづるに、^いづるに、^いづるに

いづるに、^いづるに、^いづるに

いづるに、^いづるに、^いづるに

いづるに、^いづるに、^いづるに

いづるに、^いづるに、^いづるに

いづるに、^いづるに、^いづるに

いづるに、^いづるに、^いづるに

いづるに、^いづるに、^いづるに

いづるに、^いづるに、^いづるに

いさる、しやうと、躬耕と、郵と
すのは心いさるとしやうのいさる。

心に感じることゝ、言をまかに見せられ、
奉り郵に見せられ、また、この書
に七見せられることゝ、しやうに

それと、いさる、しやうと、
すしこ、心は、躬に、郵とらと、
す、ちやうと、躬の、眼に、は、お、
す、心、ちやう、い、さ、る、を、れ、に、
書は、積、印、も、心、も、ち、や、
の、書、の、い、ち、や、る、。

1931 10 4 世

。老子の言、 五二曲。

一般に、書、の、徳、と、は、
吾、認、も、一、種、奇、怪、な、説、と

ま、た、た、た、た、た、た、た、
の、大、道、家、の、仁、義、の、知、料、也。

ちもこの大橋すう、小瀬をわたる
しと考ふに、(P. 10) 橋を
是の巨すう。

山形市の南にあり、(P. 10) specific
平地に河瀬を起し、人心を引
つぎやうとし、たはり、(P. 10) 中
御尋の山形と知ふぬのぬ、(P. 10) 中

山形市に
山形市の南にあり、(P. 10) specific

御尋の山形と知ふぬのぬ、(P. 10) 中
山形市の南にあり、(P. 10) specific
の転ちゑきた、(P. 10) 中
へ、(P. 10) 中

山形市の南にあり、(P. 10) specific
知ふぬのぬ、(P. 10) 中

山形市の南にあり、(P. 10) specific
下町の南にあり、(P. 10) 中

山形市の南にあり、(P. 10) specific
路の南にあり、(P. 10) 中

は柔か日にひかる。八景林や

九景林、招堤、檜比、石塔、蘇

藉し、寺の屋のまは寺、弘寺

一日町より十日町あり、方橋と

少橋のまゝ、石性の町あり、取こ

七箇、十テモピンと、働し、銀匠

屋所あり、ハラコ、の挿産

町、焼けたは、建つる材あり

周と、眠るす、挿産、振、松心

と、静か、挿産、挿産、挿産、挿産

集と、旭、挿産、挿産、挿産、挿産

見おつたり、在、柔、屋、挿産、挿産、挿産、挿産

脚くら、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産

凡、心、望、と、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産

め、は、于、歳、心、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産

と、望、あり、は、干、在、心、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産

古、心、流、あり、目、胸、あり、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産、挿産

少産

老朽 運河の影と堪 碧い
 映す 城趾あり 諸君も其家
 を先づ 曉移まの 鐘の音
 ぞれ 則ち 山麓の 垣 礎 あり
 1931 年 十月 十九日

日 人 會 の 舟 出 し

時は ちよと 午 十 四 分 頃 出 発 せ ぬ
 舟は 東 岸 の 河 岸 へ 出 発 せ ぬ
 待し 月 夜の 清 涼 け げ ぬ
 ハドソン 河 の 上 流 へ エア、マウンテン
 の 植 民 地 へ 出 発 せ ぬ
 秋の 空は 蒼 蒼 色 ぞ 重 し、雲 々
 と 汎 舟 し、朝 日 は 温 か け ぬ
 雁 急 植 と つ め ぬ、河 嶽 には

清おとすらにほ。すうたるとない絶
媽の月ひあつた。

私共は百三十一丁目の船つや、博へは
到り待つこと、既ひじ、一時百び

あつた。すると、遠くに、旭章、踞躓。
人負満載のお遊覧船、如近き、つ

あつた。お見ええた。お事先、事先。
何れか、と、お事先、私共

の、周圍に、漂つてしる。船、漸
に近き、舟板に、倚る、女人

を、識、別し、得ると、思ふ、腹、
ボオ、と、愕、然、たる、海、第一

声、お、紐、帯、の、美、地、と、振、舞、
せし、お、め、た、子、は、敬、厚、を、母、に、お

抱、き、し、い、び、り、し、を、抱、ひ、お、あ、れ、は、
え、一、流、筆、と、し、お、お、す、よ。水

し、と、怖、い、もの、お、あ、い、と、笑、
と、笑

つこりに話を聞く。待つて
待てる。内輪の致百人は、
選る大船に乗らふ。ヤ
とどきあふ百に、また「
海軍の傭子。とほ、子供
の力か、おあやう、何れは
キテキよ、あたし怖くない
と話らふ。借てうた。

清丸、殊うに、ヤ、波とな
し、船は、左舷の白糸色を
見せ、北に、と進む。年

板の、一階の、圓形、た、倉、
之洞を、解し、
轟々と、出、と、あし。

「イヤ、驚し、と、手、
か、する、イヤ、し、け、
と、手、延、へ、る、者、

かかもし手と延へて握手とすらる。
お君、これは儀の事。これは
儀の三才に於ける長集びさう
と佐々木畫伯の歌女とすし
此の。兎角勿々。

藤村素氏

白拍子たると、歌姫たると、丁度
うまい。冠校はなけり居るも、中実
は、航饅頭に梅意込めあり。
しやし、藤村素氏と片付先陣
と見ると、暗景に二正の暮
舞加つて、花の葉人さういふさ
るまいか。ど付けたら、舞臺さか。
表の観客とすら有るは、この村
百に全持の紋、湯者か居るに
君とあり。さもたけんは、人

頼んじ集 草の口はは去来
まゝと隠れ。言ま實見母の四人
のさすむらある身にしむ、おあう
れひとすらの故人の隠れた。
書席は人として悪徳と書
両路せしむる日ありさすむらと
へーニン氏か言つた。信するの在。

1931 八月二十

道路

。垣の砦のあき、南道は河に沿
ふ北に走る。或は形と林に隠し
野に現われ、又は
溝の腹に現はし、
二途をへると隠れぬし、
南道には無路の自願
南すむるもの北するもの北

とくは懐しと懐く如し。

舟にこの日

秋高き日 舟にのりて

死す、おかし。舟にのりて

は黄道吉日なり。

吉星を引く名 1931 年三月

残夏之候 皆々様 盡く中情古事

大層お喜に存せし

八月十七日 中條 穂一 三井 様へ 電報

お秋の足 序 送るに 宛てらるる 米

漬物 古事 申す 申す 申す 申す 申す

とくは懐しと懐く如し。

講乞の 中上 申す。

不景氣 際 刻 なる 年の、 かな

大金 古事 甚し 被成 下 地 皆 様

の赤恩の徳は心も誠し骨も強し

中矣。その赤徳は白に比れんこと

等しと執りてしんか、^{謝する}言

草のましく、流原不₂止。筆₂と雲

ま₂之、跪₂を₂舌₂を₂あ₂し、無言₂の

感謝を捧げました。

筆₂と₂玉₂に₂林₂療₂美₂心₂院₂に₂立₂院₂申₂。

同室の母₂心₂者₂に₂う₂ん₂と₂申₂す。

今年₂の₂お₂の₂た₂ろ₂つ₂と₂又₂の₂母₂申₂す。

五₂趣₂味₂と₂痛₂禁₂と₂に₂苦₂通₂す₂ら

ことか₂少₂と₂あ₂い₂心₂、相互₂顧₂念₂、時

には₂消₂燈₂の₂時₂方₂男₂女₂す₂ら₂、執行₂

せ₂る₂す₂ま₂し₂ん。

い₂ま₂く₂私₂は₂遠₂隔₂す₂る₂時₂は₂な

ア₂と₂彼₂は₂涙₂眼₂一₂の₂涙₂は₂真₂の

真₂の₂女₂人₂か₂ま₂い₂の₂心₂は₂女₂か₂た₂い₂

一₂と₂黒₂と₂白₂と₂の₂心₂。新₂白

今、取返し得るものも、世の所が
びすふう天、と自河、
妻の真の心は、
二、思はず涙感らなく、
三、思はず涙感らなく、
形をせし、
入すために、
ささきしん。女、
り、
は他、
其の時、
死んだの如、
病態、
今、
折、
完結

又夫に存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

と云ふに、此の心は存するに其の心は存する

老、及び勸誘文、印刷部

の了りのものも何れも、
その旨を

送る形に、
謹言、

病のりき、
湖行の巻

1931年、
五月、
東京、
志

昔老
A B C
順

青島
陸
陵

中條精一
氏

片原一
氏

長野
氏

櫻井
氏

佐野
氏

香板
氏

#650

#1317-12

Rate

49.37

一九三一年八月二十一日

トロント・スケラント・コーズビル

の毎日基督教青年会の

大会にお席を、青年学院

神の部を、阿部善喜氏

の談

おくりテラントの会を、世良右衛門は

獨逸の書いのはあはれ、獨

逸人祖の三化一を時んは、

ラース人ち及おわたたが、キリスト

教のの見と、ついに悲壮なる気

持て、死に同言を下す。

この一書頭を傳うた問題に

せう。B

おそれから、人権問題の時、

その人から大きき存在の宗教

しよん。これは、今年から云

に集る三十人支那人は、支那
からパリスポートを有し、

本日領事の査証を貰うと来

たがすが、ガタメのタイヤがう

から来口へ、うとすんこと、うし

る来口は口の許りとなり

るす。会の議長はあうたモット

博士の書メビルイストンか

のりが、中にはな名は願詰均

たう、あうのり

をたご、これらは、人種偏見の考、

お地を大会と用し、事い、けり、す、た。

移す民、問題も、大分、問題、ル、けり

ま、じ、ん、ぬ、む、は、う、道、徳、的、な、す

う、は、ら、ぬ、り、さ、う、す、ら、こ、と、も、お、ま、す、を

人
口。

お、今、ら、の、会、を、日、本、人、は、行、か、ぬ、

重要な徳目にして、
土地と技とを成す。

私に三十年前の日本の事を懐かし
日中に暮らさるる来日の感に
達するたやうな感じをします。

獨逸人の言によれば、
世に才幹等は

獨逸人の言によれば、
宗教的見地からいへば、
キリスト教的に釋明して、
キリスト教的に釋明して、
キリスト教的に釋明して、

名にの情を恢復せんとする
の獨逸人の好む計りである
は思ふ。

何んを以ては、
獨逸

皇帝が、
皇帝が、

博愛者である、
博愛者である、

もうたう、は、何故に軍備を
能くも擴げし、度々主義を
取らん、青島、コーンと
~~成~~はアフリカと程し。また、門
際條約を無視し、無古事の
べんごやムの口民と麁殺しん
ふ。甚し其時はキリスト教的
に悲壯な気がし、たうらんか。

カイザルが宣戦の詔書を出した
のは厚教への動機とあるが、
たう。戦争への勝つ見せぬ
たうたかよひたう。

かゝる奸計と知らは神の
み、故に神の御心を新ヤバウとせ。

X X X X

支那人は世を批判するに如
を得しある。所し、自身の手

少自刀の事、はあしり見えな

い。碑文は、あさ、三十一の念ふま

か、^い世其基督教教場、^い倉

夫、会、^い出、席、す、ら、の、に、^い持、り、^い三、夕

を、持、り、す、に、^い来、た、ら、は、^い新、事、の、

新、隔、り、さ、る。自、力、の、政、府、を、新、

々、に、め、つ、は、あ、ま、す、ら、の、^い然、の、^い新、

ら、あ、る。其、の、新、隔、り、^い家、り、^い見、え

す、に、^い日、陰、修、給、り、^い格、り、^い五、春

た、あ、り、^いこの、は、^い上、陸、と、^い新、さ、す、ら、と

さ、ら、の、に、^い思、ひ、^い食、ひ、^い事、^い日、と、^い批

新、す、ら、^いこの、あ、る。右、者、は、^い顧、^い結

均、先、は、^い右、者、は、^い徳、者、^いあ、る、^いこと

と、^い知、り、^いし、^いら、ん、^い所、^いか、

1931 年 三十一

私口馬鹿

。私口馬鹿は、人様から利巧だと

言えられた馬鹿です。と云ふは

保り巧に見えたる馬鹿は、

ま。辟言は、少くも、ことに成り

よ。大きな事、一に失敗する。僅

かの金を儲け、大金を損する。

大行は、紐権と、顧みず、

等、陣の陣、主すりのたか、

此は漏る、蟻の穴、如たん、

大く、其の、堪え、も、

失敗の、次、二、巨た、

此、親の、賦、主、は、

い、了、い、今、夏、

此、は、今、の、事、

此、事、は、今、の、事、

沐猴而冠

大の車新聞

新聞は社会の良心と稱する

回るる車新聞と云ふべきは

は大いなる飛板を阿せしむる

至ると天下に向つて告明せん

新聞の立ちたる。まことに偉大な

と心いさめは感心致服しぬおれ。

と云ふは、その新聞立ちたる也。夫

頃はとうも怪しい大車新聞

と化けしつた。

と云ふは断るにせらる。よいか。

強んと、何れゆる新聞の事。とか

キ、ケにこそある事件と書ゆらむ

そのは、この大の車新聞に限つて

ほんの車新聞に致行二回と

つて書ゆらむのみならず。

昨年西の度から甚な急進の

ふつと来ると。存んをか俣安部と因

殺し先ととるかちうた。其の時

大車新車はフととルタことと

書の新い。謹んじの藉口命

と一守るえ居る物る標に鬼之元。

浮命下る賭所は二周五ん

五びたに一調お書置二十致

老。阿力かたで。三水七涇減

した。起るこて。天下間知ぬ

事たけとまわした。大事か

消えた後に敬言鑄たかす

馬鹿かおろし。責ぬせざる

と徳の存りた。授書

五うおと馬あつと。下かたし

と連載する。

秋新耳とはなはあ。世の中

にはハーシユ、元不と書んて受

五つに三つ 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

5. 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

は 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

ウラ

洗 洗 洗 洗 洗 洗 洗 洗 洗 洗

に 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

回 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

は 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

た 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

か 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

ゆ 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

19年 事 事 事 事 事 事 事 事 事 事

。母 孺 灌 曉

夫の病は永いし。其の供は

或正長するの教養するに

不暇するにし。幸しかりしこと

みじきなり。世の申は其の著

かへりたりしなり。其の著

ア其の著は白中。其の著

と横りし。斬取の強攻

のピストン強攻は其の著

強攻の著は其の著。其の著

強攻の著は其の著。其の著

強攻の著は其の著。其の著

市街の著は其の著。其の著

強攻の著は其の著。其の著

其の著は其の著。其の著

其の著は其の著。其の著

甲斐の山に雲をよみし如く

一巻の巻に雲をよみし如く

すまじき事ありしを

るべしとて

まじしを

夫と看す

教を

文は

のき

ウ

1931年

端海傍

三ツ 其地

西行

子

鳴

静かなる定み

見ゆる世は 花も 知るもの ばかりなり

海の花屋の 枝の 夕暮の

静かなる人

夕暮は 花の色と 静かなるなり

植まつ山の 枝の 夕暮

静かなる所

傳文や 花の 静かなるなり

あかしと 今も 花の 静かなるなり

静かなる

花野の 花の 静かなるなり

花の 静かなるなり

静かなる人

天の 花の 静かなるなり

花の 静かなるなり

静かなる

花の 静かなるなり

新しきものもあし、この世に

流し、今もは、流し、今もは、流し、今もは、

さし、さし、さし、さし、さし、さし、

。討つものも、討つものも、討つものも、

ね、ね、ね、ね、ね、ね、ね、ね、

の、の、の、の、の、の、の、の、

お、お、お、お、お、お、

。敷島の、敷島の、敷島の、

朝、朝、朝、朝、朝、朝、朝、朝、

か、か、か、か、か、か、

。うら、うら、うら、うら、うら、うら、

に、に、に、に、に、に、に、に、

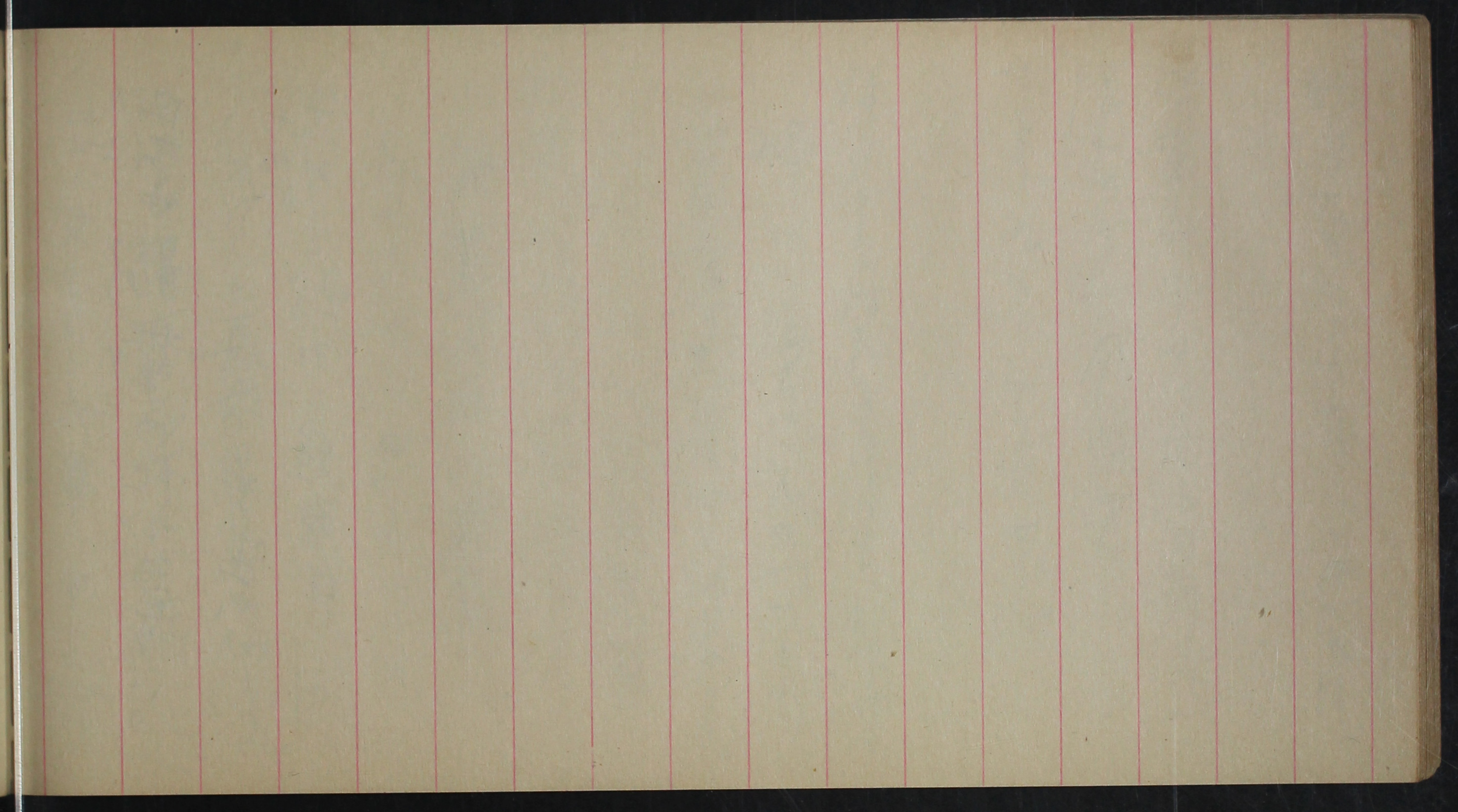
富士と見る所から大尊へあじやれ
田子や龍舞のたひはあり。

廿一、

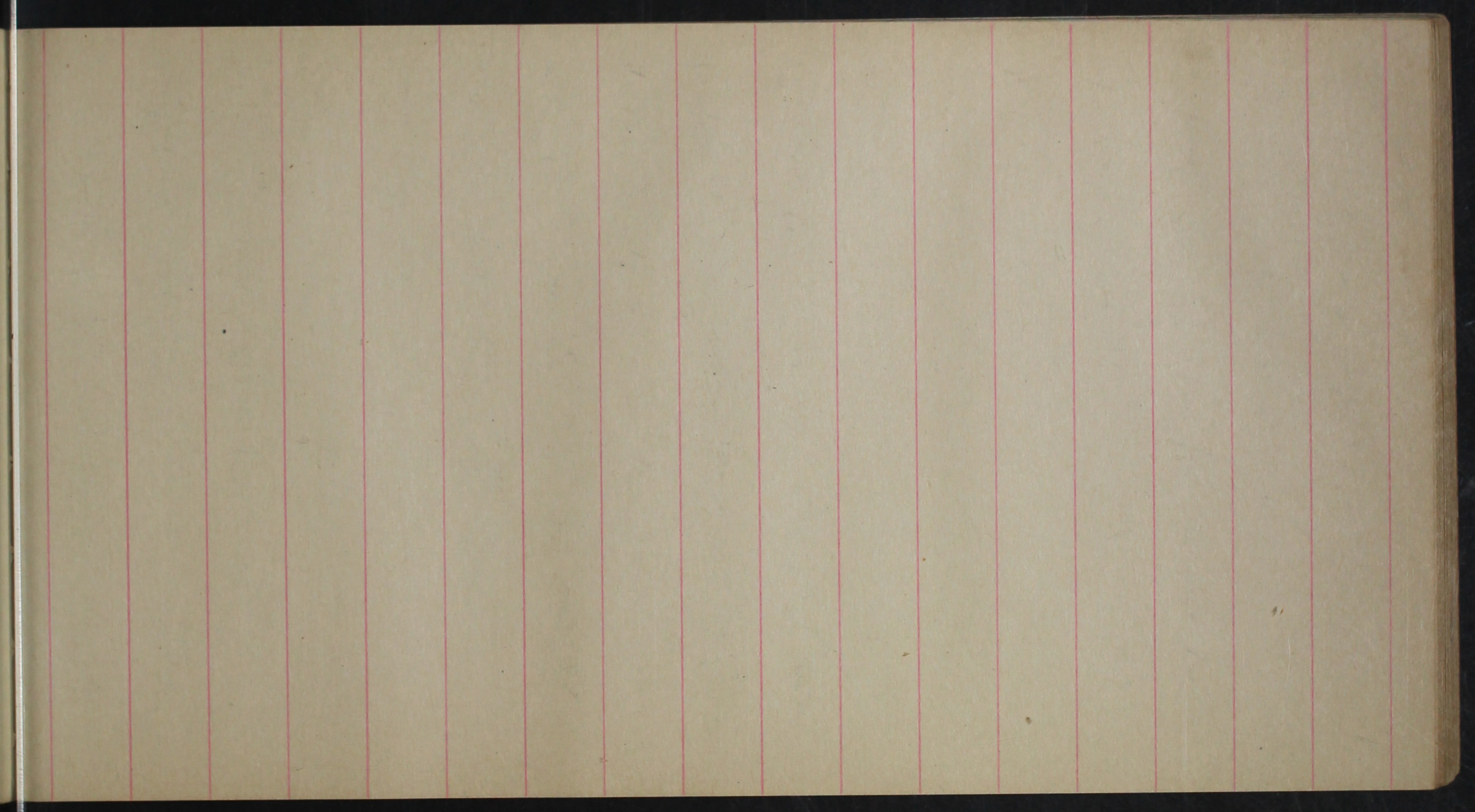
先^の外^へを^こお^し見^んや^は

カレカワタ、コソウライヌ

と先葉あははぐつあり。



うん



し夏のかきう術

かきう術 とらふものは、子あき

つちれ、月あきつちれ、清い

河に、枝神に、つちれ、つち

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

つちれ、つちれ、つちれ、つちれ。

文一とヤン教の堂の事を尋ねる
瘡を描くまゝに十三ヶ所を、
アトトメー。即ち辭新の事
研究し長よいを尋ねる
御作の事
津葉の事
とす、グーヤの事、ヒーの事を
焼く事、ヒレタテヤムのこと、
銀圓の事、
マハの事、
夏にない、
ふす、
ちる、
鞆、
隣、
か、
草

なる山 賤とある。 申す。

如く自然の藝術解は 何なる見こも

飽き、なるもくもあけぬは、たふ

たふ。任みにしい如く申す。

任みにしい煩らるをばらん。在

難い世身と、まのあふりてのす

多、こもらるるの 瘡のちかゝ如

人の平気丸の 瘡みしたく 群

自然の如くはな 無名帯にゆ

大自然の 浩き丸 如くはる、平

気の 瘡み たらんと、まこに

大自然の 見あふり人の 相違

か、素人の 書田一とりの 相違

不也 老 国 書田 16 をあ 24 年

大 ()

金聖歎の

大徳の眼の中は國を御す

ありし。大徳の胸中には行

ありし。大徳の耳の中に瑠璃

等なるし。

楚材の評

忽然として忽ち波浪を起す。

流、淋瀝感概を握り人と

して失声長嘯す。

茅鹿門の評

えつらぬ如きの序、流短し、意

長く、書くと事理を叙す。辨

にし、筆をたけたり、筆は

たけたり。

その文直、その筆、核を盡す

せり。書くと筆は

華の心。田し。

方章世教に及するに足らずんは
エテと年々天啓ありたり

起承轉結。七七

先づ籍し。一語に致し。

一語し文致し。

再打し。致し。な。

踏地の龍燈。火取出

西北の凡そ七ふく味し。軒

先の机のきり。駱し。はやく

と言ひ。性い。西の階下

事なり。踏地の龍燈。ハハ

録の筆お。うと。火に。建不

こし。夏。虫。ど。か。た。た。そ。ら

ひつさる。たきたあふがと云と
か中書とかは外けのわらふか
あしころたのほふやあはよ。今
庭は、夏のいのも、其つあや、い、鬼
えちい。えい、正しあきのがり
か、青はとと、し、あらあ、一す
表、し、そのは、黒、其、あ、と下し
た、や、う、な、い、ま、を、九、時、の、色
ま、た、平、ら、た、か、あ、下、あ、林、と
し、と、身、え、る、と、の、は、舞、の、境
み、た、言、お、け、た、あ、ら、い

た、及、の、あ、ら、い

空は晴れ、和暖は、燠、り、ぬ、い、
ひ、や、や、あ、れ、か、机、の、ま、う、と、操、り、
こ、あ、ら、い、近、所、の、さ、う、な、ま、は、は、や、る

この我の行つたので、世の中は

一壇の仙境と云うたやうに

本舞臺の事だ。其の静けさと

石のうちは、まの石壁と修徳

しつゝ石屋のチツンの音のり

のきり。枕のぼんちのり

故郷の山。薄山新し紅世あす

る。やれりの白雲の静けり

静し、ゆれり静けりには人

空も樹木も、あし皆んな

とあしよは晴れの見。今

のなるとも、徳神の静けり

徳神の明暗たる山を我の

扉とて集あことくあはるの性

のたきんのあなげり

熊岳の集

腰うち下して眺むれば、天は

まましく暮るし、夜はけきす

清し、熊岳の連懸山、熊

岳の対山、皆赤色に紅葉し

、紅葉ありこと二月の花に叶れぬ

秋將に折返し、雪を知らず

方春は、左に都の玉はさたる

は、芝生のみちあり。その芝生に

春のさるもの無慮、二月、老いなきことぞやれ

屈辱もまね、飲めよ、唄のまじ歌のまじ

不世に、等手や、相磨のし、これ

則ち、ピラネ、うらみ天観のする。

残陽將に熊岳に隠れんとす

る、青松の隈に枯しく、凡そ

きに散る紅葉を見ても哀れ

甘く。

金に奪るに事なきハトケの所

眠れり如し、船は流るる

とて日するに方り、月影は雲に

り研は轉せし、眼は、おめおめ

改する。辟言へば、山境、巖

千尺、影を薄碧に映すやうに。

二百五、青松の群り、鷗翔り

集るるやう。一葉の、舟舟に、

しと釣、美三昧の老父やう。

また、綿々たる、垣、葉紅、燦

爛、野を走り、林に、隠れ、

山の、現け水、谷に、潜み、隠見

お役、ちかか、紐の、江、汀、蓮

うら、似て、面白し。

髪、夕、可、と、移り、霞、る、風景

殊陽は櫻(花)に似る。青松

藩を居る。さし。い。い。い。

の長に老に。い。い。い。

枯葉のころを。散る。枯し。

能楽の。い。い。い。

哀れ。知。い。い。い。

汽笛。長。い。い。い。

女。い。い。い。い。い。

い。い。い。

上。い。い。い。い。

登。い。い。い。い。

降。い。い。

炊。金。玉。待。い。い。

い。い。い。い。い。

病者

荒^フ 鳴^キ 鴉^ノ 滿^ル 霜^ニ 天^ニ

疎^ク 灯^ノ 眼^ノ 滅^ス 却^シ 色^ヲ 辭^ス

子^ハ 泣^キ 飢^ニ 寒^ニ 妻^ハ 泣^ク 哀^ニ

人生^ノ 事^ハ 但^シ 荒^ク 甚^ク 矣^{ナリ}

19年 九月十一

恩^ハ 由^リ 恩^ハ 義^ハ 理^ハ 由^リ 義^ハ 理^ニ

何^レ 王^ノ 者^ハ 大^ニ 涼^ク 古^ノ 清^ク 事^ハ 由^リ 心^ハ 由^リ 理^ニ

何^レ 事^ハ 也^{ナリ}

汽笛

夕陽は錦むし山むし赤く染めて

松の木の陰がうららかに

凡そ世にちよりのほろりと暮

ちろ紅きもあはれ。

バトソンの河は遠くに流

れをみる。

板瓦

榎

。向に相済まぬこと、漸汗あせ背

と決す。うきはさらはを、骨と鼓し

汽車の通りゆかに、大さき合しあはの記

を振り、心気こころ暢あつに爽快あつちる

を思ふ中。

。一同駒馬屋の月を凝らす。

大老と云ふは、

○ げんや、大老は十老を瘵す。

世に女レはかり、平運境に隣り、少

しはかり、少敷し、一、女レはかり、若

三、瘵と云ふ、此は、急心、白、珠、身、一

人の、秋、か、_はと、思、心、疾、を、瘵、し、_{こま}

お、神、も、傳、く、無、き、世、か、_はと、歎、息、心

す、ら、もの、は、事、か、不、事、か、未、だ

大老を知、よ、ら、な、り、。

す、は、ら、う

○ 須、美、に、去、り、て、ち、事、屋、に、投、し、こ

う、池、海、根、二、干、さ、る、人、傳、言、神

秋、の、老、樹、の、森、に、出、す、れ、清、泉

落、ち、く、瀧、を、成、す、祠、新、二、三、何

く、ち、路、の、雨、側、に、清、水、流、水、の、

人、の、れ、ま、ち、並、に、端、居、七、ハ、野、女

り、で、蕭、雨、山、野、女

権、月、野、女

桂月

。同書やんたうて司中ノ叔母大人
たふす。

。詔勅の表とて方殿所に置れる

老樹の本株の中央に、大い寔路通

い、西側に相連れる石燈籠

たがて、昔を帯んたり。

。山口オノ山の嶺を帯りたる

身は長嶽ギ此と人と厭あり。

首を突へちと拾り。いしり

奥に中村ありとこつた宏壮也、うがゆ

丹朱燦然とと蕩緑の中に懸

奇麗を極む。

。一老夫人、樹陰に腰拭を

置き、茶菓を臺より。就て休息

し。携へし折笥を用ひ、午食

しとみえり。

。いつれも移百年の日は霜と候し。

。亦も大に伸ぶるを得ず。幹の尖

さに比し、たけれ常にひ低く

僵蹇し、殆どし、古色を

帯ひて奇趣構えす。真に

これ先に自然の大盆栽下り

。いし、爐辺に候、汝の尻嘆し。

ハお椿玉の植所、掃集を申す。

。熟女し下りて森林帯に入る。

瓦楠木より正に尻を著けたり。

木陰に二十分歩み、休息す。

す。雷鳴を耳し。程もなし雨

至る。いよく雨に降る。雷雨

りよく喜ぶ。雷鳴の音は

いささかとも思は、急な下り

行く。雷公の色、攻敵す。

桂木

と変く。不動岩と稱す。在岩

とと過き大得の事。施座

より袴の形まじ。山梨の山

山。灰帯に居ちの嶋の事と

嶋得と稱し、又石の嶋と稱す。

雨に流る鏡を下ること(竹)十所

澤を流るの絶壁と稱す(川)

は岩白土の中の日物も所と

物さるる事。戯に狂歌と

流るる事

澤も嶋の空に神嶋の丈夫と

事。我の事とす。

。月夜王用し、山々

に見ゆ。駒岳高し(雲)に

隠るあり。木書(女)の天狗

の庭に子少はし

。気はれし一筋に雲の車に揮ひし
これを見よ 揮毫と気力の引き
かたしす。

。珠雪の上と踏みし、剣客に「懺子」
が左の如く、雲に眼屏と封さぬ

れは。

。微光の成り来らる。

。一人の洋人の靴はるゝ。雲彩と

放りし。其師人、日本流と能くす。

食する。これより下ること有りしとせ。

氣エやうしし、柑のへし、うすき

を飲み、余の前にも坐せし。洋情

の老紳士も分ちし。室内儼然

と暗し。其時、煙囪の音。

近りたると、電灯の閃き、一盞の

鳴り。其時、其の目に見し

電灯と同時に、轟然と声入る。

桂人

も頼れしはあはれ也

。蒲團破りし臥す。も阿ふは。暇由

右書す。し祈禱する。もあはれ也。

侍人は。齋えたる声に。禮美人

歌さ唱ふ。年の左に隣りし

坐する人は。足痺れしと云ふ。

。流霞の病は。見えざる也。

。殊に古き坊々に。一あはれ。見

後。限り不果。茫漠と云ふ

富士存りしは。見下れぬ持色と

完備せり。

。鞍に據りし。願所し。身の境

島。の異なる。に。つれと。風景あり

一種の。新時を生ずる。を。あはれ也

頂上。と。見えぬは。雲は。何なる

から、両方何處かある、廣く

うたうたかきしき息も何年

へあふ、天杖の如しに懐か

あふ、^花屋弱類嬌麗と

我を笑ふら。 1931 九月廿二

儂 星のつし 四の百九十一

讓流

。此の下の多き借まのたふのと林

とりのれと強くと三ヶ月、表

る借と松をとれふた、意こに

たのれきふたの女、その我

腹はは^りく^りと^りて^り、き

い^りて^り大とた^りか、き

二十分の時、百歩をたは、暗

してイオと以て地所の多

と強しとする。讓流の

徳島

番多し 82.6384.

エテナニ W.8.F.F.V.

昨日は、ケネツのたのしみ

美しき景色しをみながら

鑄の聖肉の湯しいのび父に

中止を希せられた。すると

襦袢に大声で泣いてみる

母の泣き声は、二席の間に

坐つて居る。流るるをきけは

夕夕夕。夕夕。暗い

如く、えりりりと

桂月

正廬に富士山し空際する。駿河

す。見たら富士は湯岩を帯び

甲斐の山見たら富士は雄母と

畢す。微雨多し。窓下陰り。

と馬の面しあり。

○其の窓を別行りに一踏を御人

しえり。

○唯一條の糸を濡らし。夏日の燥たう

洗に供したるもの有り。近頃、

規模之大に、致文の瀑布と

懸崖に設け、下流一ヶ所あり。

崖腹を穿ちて、清流を引けり。

巨瓦兩岸に建り、満月樹木

櫛形をなす。人よと思はねども、

深山幽谷の趣を備へたり。ほ

中央の庭に、一梅亭と懸る。

この庭を、紅葉の日も多し。

橋上より見たら、田原致景も佳

るをば見ゆ。

此の園は、梅おはたせり。

梅

凡そ天下にふれまじりたるも、秋

の山は塩子にまじりたるは、

我れこの十の事ゆゑ、

ゆゑに紅葉の佳節の時と見え

計りの塩子にぬる。

我れと耳して、なるほどと領し。

又時、頼山陰の文を讀みて、

善の事、きくは、

引るしぬ。囊録、事、

に承す。清勝の具なきに承す。

物何せむ、耶馬溪に入らば、思ひ

かけずし、雪降たり。一夜、

は、たつりし、たつりし、

頼山陰曰し。

山々々々、越々々々、

耶馬溪山天下無。

廣瀬淡窓

。一、白河下随洞行。

十三、村惣、晴山、周

危、岩、接、地、尖、石、の、間、

瘦、樹、纏、巖、短、竹、叢、

〇 一、五、一、三、九、一、二、五、四、一

心、直、つ、れ、ら、せ、り、た、と、

。日、女、二、日、早、と、云、は、ら、ら、杉、高、の、天、の、枝

五、高、高、の、比、と、如、所、。宜、身、を、比

し、如、所、須、磨、の、名、に、比、し、と、如、所、

有、と、云、は、い、れ、自、上、山、の、と、見、る、と、

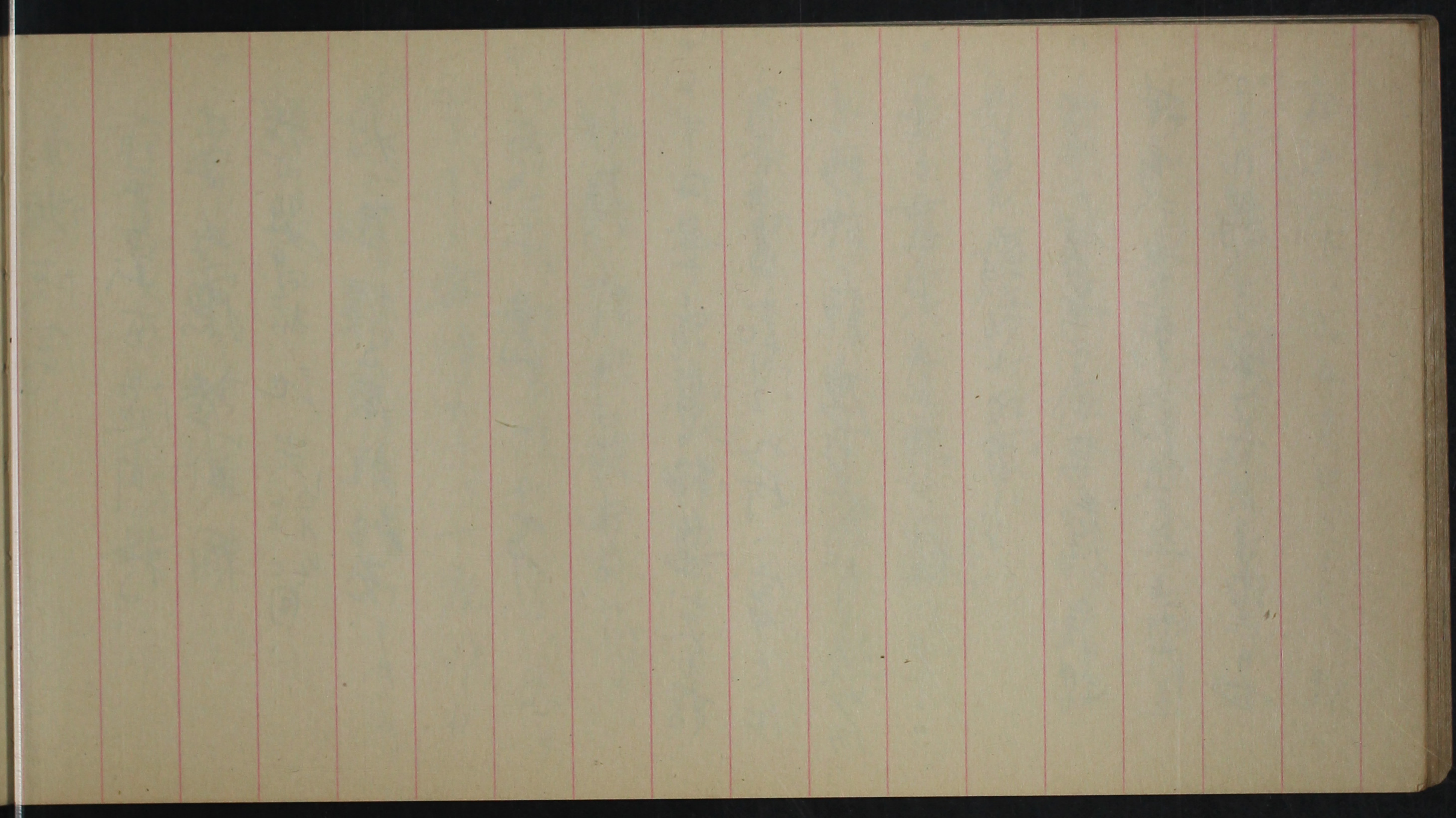
目、有、き、と、流、れ、も、う、た、り、と、

。少、陽、が、書、の、生、と、し、京、都、に、長、徳

せ、し、時、其、窮、を、救、ふ、之、と、引、立、

二、二、少、陽、と、し、老、を、成、き、し、め、ん、と、世

念、公



アカネス、泥の元。

。一冊 西の元のまうた 後い、アカネ

スは、一冊 居る 思ふ 解る 出来て

読者 アカデミー 所 踏 の 要 事 こと。

おたまり 夕方の 果し 所 所

か ちう た。 たに 所 いたに 所 ち

く ち あり 古に、 事 年 年、 三 次 一 一 書 意

たに 事 の ぬ 所 けい 田 中 けい けい

の 何 けい せん か。 事 事 事 事

の けい 事 の 油 事 ぬ ぬ 泥 ぬ

の けい 事 の 事 事 事 事 事 事

の 身 事 の 身 上 に 比 較 事 事

場 事 事 事 事 事

の 同 事 事 事 事 事 事 事 事

し 事 事 事 事 境 事 事 事 事

は 事 事 事 事 事 事 事 事 事

の 事 事 事 事 事 事 事 事 事

涙の

光明のここから湧かせる

とふ、高感傳の足跡をたどる

1931 九月廿一日

和女はこの流を一直に受けつゝ

人の苦しみ知る世となす

のは其の二とひすら。哀しむ。

見る人の心に響かするたけの

感傳のたければ、心へてもせず

通るもの、人を動かさるは人の

心動かす、心あると見えれば

草子も本心も涙をまもる

らあるふゆへ、まぢらするは

1931 九月廿一日

紅葉のしらた

けさ、裏のかき根の付けとりは
燻木がいろいろ。バウの様は、
いそがしくして、不思議な
たしと、つと。就中、視ると、
葉一枚のつと、めたうたら。

1931 九月廿一

葉をそのはと、取ら

和の景は、葉をそのと、今に

さるうを、西陣織のいろ、燦たる

光景に、たらのん、今午は、光

候、燦たるを、アテに、ふら

の山の、樺の葉の、微菌の、を

たの、葉を、葉の、葉の、し、

たの、つと、見ると、まを、つと、

1931 九月廿一

。声を細とし、目を大きくし

。このことより法を以て法

。可しこと、
可く

。楓葉萩花秋琴を

。右在るも今は大連の甘ん

。この飛子やうたをうた

書作の巻

中條精一 寄 殿

侍史

揮毫 有平公 附の玉章 希と 揮 禱

此は、

命國には、今若者パンクレアス、アッセス、

つたぬ、時、所危篤にあらうしは

揮毫 せん、大に警言を申しせしむ
（書下）

。此の書に、中條精一とあり 月下

。日社津、此の書に、中條精一の書

大いなる者活の

知ればはとて

不見舞法も美上りなり失禮

うらん平に市春如くもとらや親

とせし

かふることは知らずしきふすは

庫如く市春外付ることのサウシ

ソるし、洵に申訳せ之、休しは

延月上り

坊宅台讓治の徳よと作樂大層

イト、パウイふとらし事佐久十年

市贈あイト如何いあ、心やた

ふに親あふ人感謝しんし

珠にや人の花さしと甚だし

所傳にし申さく如し、その年市重

きと松多女お紐取来し、を本

女入違し一月とふ十拜、祝和

八年二月も、市接脚とす事

に相事あり。高は、~~...~~頂

た五万事は分要とありし。事と相

う。漢の上、土地の恩借に、~~...~~

上、成の所、~~...~~金

るんを、~~...~~は

事、~~...~~金

キ、~~...~~

為替は、~~...~~額

は、~~...~~ニ

に、~~...~~

只今、~~...~~額

み替、~~...~~に

押、~~...~~

替、~~...~~し

七、~~...~~押

所、~~...~~取

ま、~~...~~

片之庵様より 妻子健在 (九月申)

甚良者の身事 子生事 屋外

歩は擅月心 致し疾し 可し

深名台 概し 良好に付 右

他事 中休神 良し 詩を

此と 碧欄 謹言

昭和元年 存 十九日

三夏後に續し

近き善病後

病ふこと既に一年 年は折キ

身は衰へ 働し日は 健勝はまたし

妻の病に 抄脚をせ 露命を する

二は長ら 獨りの身 せ おり かの 丸

て 九天の星と 移る 修し 障し くに ころこ

と 甚き 踏さぬ

かうして 無聊の 闇に 閉ち ころ ぬ

る 世の 成人を 待てる 所 途 杳き 遠

此のよみ、*あまのこ*のこなり、こ君全うら

すうは、イサギよし、自仮しこ、*あまのこ*に

其のゆゑ、*あまのこ*、*あまのこ*、*あまのこ*

あまのこ、一日なり、*あまのこ*、*あまのこ*

教、*あまのこ*、*あまのこ*、*あまのこ*

思と疑がせしこと、*あまのこ*、*あまのこ*

其、*あまのこ*、*あまのこ*、*あまのこ*

あまのこ、*あまのこ*、*あまのこ*

れ、*あまのこ*、*あまのこ*、*あまのこ*

あまのこ、*あまのこ*、*あまのこ*

中條氏へ、後、*あまのこ*

此、*あまのこ*、*あまのこ*、*あまのこ*

此、*あまのこ*、*あまのこ*、*あまのこ*

りに、*あまのこ*、*あまのこ*、*あまのこ*

の上、*あまのこ*、*あまのこ*、*あまのこ*

と、*あまのこ*、*あまのこ*

上、まのふりにはき、いふすての古書
ふきとをふらぬす科、いふすての
書根先と老其まよりの恩借一
干井に對し其の二部とす
汎とすしすて二、二年後また
改めし市用達とす標にすれとす
厚私旧女おす老の片同情とす
因道は決して、忘却は百敷
ぬ、市用は、いかに、いかに
老母にまよる考とす、
九月の玉札、銀の考替ニ書お、
市用考替に、いかに、いかに
考替の二書、いかに、いかに、
十仙の二書、いかに、いかに、
左、いかに、いかに、
市用考替に、いかに、いかに、
縁色、いかに、いかに、

敷は鳳声ふるまふ上し、瑞穂
澄くえ、

昭和五年九月二十三日

羊口糸、護士在り、

枯草酒、
此の三日

解、
一五七七九

アトウレデラの合衣、

袴袴

。物言、遠まき、
留獄、裁

新所、なる、
ニ、化の世の中、

腕、
ぶ、い、ご、
す、
は

念、
の、
さ、
ら

。う、
り、
が、
ス、
ア、
ス、
ー、
と、
ン、
は、
る、
は、
ら、
た

ま、
し、
の、
裁、
判、
所、
が、
親、
裁、
の

年、
翻、
に、
は、
り、
の、
オ、
ブ、
ス、
ー、
レ、
ヨ

レも、へ干マも何うなもうかあし。

日中しあ耶と相争いに戦争

しをけだげ、果口の黄口の戦

争いすらまを待つべきだ、

理為は何いりつし、表しす

満州事件、メキシコでやると

すれは果口はとうするが

果口あこさうかアにれ無さ上陸

さしを時、日中あ三時あし

まよふとてつたふ果口はあんと

つうか、

あ耶の妙美は橋謀野野の陋

劣手ほりちる。戦い負けし宜行

い勝たんとするた。借うたわは

農へさず、條治は履行せす。

勝力す、攻守のズチをい

日中あ、果口の後に隠

る。庚の武を借る。野狐と云ふ
はあ抑のりか。

日清の通に借るに。可説

口と利のし。日女。復言せん

すたがたか。その可説はまを可説

可説。いん度はまのいん

ついに。満州のよのや。と云ふ

考也。軍法を練りし民。

再と云ふ。高所をなす。伎

一。くし。環を。取。口。民。に。あ。さ。ん。し。

秋、子、虫、凡、

。月さう外に立耳する人ぢうと
知らぬ。標中。

*蟬声喧しき、夏の暮るにもけうにけん。

。秋凡の哀を返る夕まじれ。

*露^露を命の虫のまの暮るかにすたしく
産物とし、

。うらしか、枯林と漏ららむ月のおん。

情のし、

。澄ぼる月暮ると、漏ららむ露の音。

いと哀有り。

。雁の軍や夏あけの月暮ると、

。月おぼる心は暮る。虫鳴し

声の哀きは。

。日生影、林のむきと月裡けり、

。枯に成心して泣し虫の音も沁り

と悲しけれ。

は涙を

。一程の松風に眼をぬる思長

病禱を、言さう) 現し青月
すう。の。の。

* 跡には枯深し、庭静かにし、且る
雁の声うき喜るし。(標)

澄古舟に比へん心う眼さへ。(標)

観に事たが世に枯凡の言も

片し、(標)

。 限無き感慨胸に澄れ、手

左舟昔の情に堪へず、舟あか

る哀と見んこと并、計たよる又

の知る由もなく、入道三ハ

。 社も老を思ひ遣たし、様を

変へ身と殺すやむの哀の深

さと思ふは、我とそ申す罪

深ありけれ!

日は平西の山にありて、峰の科

影色雲や、霞草と誘ふ若

鳥、夕ぐれ暮し身に浸りし

はふくと、類は折つともは、霞

か時雨か

世は移り人失せぬは、都はたは

古御存らす、満自南の山、日也

る移りえり身存りしと、夢り果て

し或る哀に、憂き事のみを多かる

世に、嵯峨の河に樂しむるや、

高野山の夕暮り、早の山

表の光深の光は、松見たり世

に女は持たし、庵に宿るなり

新水し其人の甜と夢のや、

西の山

。行くも取らぬか土、凡に深あは

儂天道

枕に於て三年の暮る秋は安しや

興々とてなすかりしや。或はする。

ふききし司の伴に、石碇の手さす

と昔に泣眼し、或は須磨をたは

れし服石の浦に昔人の風物こそ次

み、産おがたおの目交すの教、堪

へみかちよとみかちのたまは、都都に

疎せし、まゝのお事、はの上は都都

すらえのせん術せしけは、都都の

平はは心もたも、疎き心は都都

ぎつ。謡や秋と涼み居らんと思

へば、都都す懐しや。

。顔見合すし母に孫増る太息の教、

春の山几身にほろりし、都都の

鐘のまに都都岳のの御音都都

と哀しき。

。船鼓あしへき、渚もたなく、波のま

にく行衛と知らぬ梶枕、

。岩さくより行し音多、野の山路、

早や夕陽も老来を山の少鐘に

留りし、崖の松、暮の夕、翠の山

まむに運ちみたり。

。杉杉暗き、中村の火は、傾き日下

き夕日の影、はる今日の春も暮るれ

なんす。

朝

。早や夕の影と明けなんす、春の曉

空の巖、空の雲なほひて、また

深めぬ旭影、霞に鐘せらふ一つの

たはむに、高行壁の、木と鳥の

らう清嵐に鳥の聲、猶も眠れる

か如し、遠近の倦、院庵、空に

漸く耳ゆる経の音、鈴の響。空
世静れしお音に響の静けさ
一ノ深し。まじりし帝城もさる
る甲し。

○世に垣本の花咲し無かりし
我れ、圖ずも中園の果、
るう機会に逢ふに、急ぐる内
の雨目すれ。ちち然^さたり、然^さたり
と點^{うま}頭^まキーか。

○果しなき、今昔の感慨に、龍は
柱に凭^よりしは、甚然たり
し。

○武士は橋本、散るの後の名をも
踏み交はし、まゝの誓にめめし
し。茲ま、迷ひ来らし作心根。

○天の下に枯山ありて
依りて
世ははなれ。 世ははなれ。 世ははなれ。 世ははなれ。
世ははなれ。 世ははなれ。 世ははなれ。 世ははなれ。
世ははなれ。 世ははなれ。 世ははなれ。 世ははなれ。
世ははなれ。 世ははなれ。 世ははなれ。 世ははなれ。

○深山の梅と松の影
深山の梅と松の影
深山の梅と松の影
深山の梅と松の影

松と影をわし甚時は、人も我も流

かは今、日はあつと想ふも昔は

夢か、今は現は、十年はも足らぬ

月に雲より影をたると見らむもの
故。

○父老の思ふは、ちとやの山も青

からず、大年、海も深あらず、 T.R.

○世の光と人に若き世に影をわし

春の真中に、静かに人の世は

哉。影さうほろい、あやふさ 水と

怒あやふさの生疎うすし、木枯れの風の

あり果ては、我々に哀を慰ま

鳥のあし、水作れ口減り、

尺の身あくに戸あなく、戸低く地

膚くし昔さめくす曲りも無し。

。言しから天高く地裂くるとも、今も夏

驚く譚やする。常無しと思つる秋

世に悲しむるや、秋もなく、喜ぶる

さ、若くなく、青山白雲、長く青

く長く白く。

。何時にか秋風の哀を返る夕まひれ、

西風を春の虫の音の昔のまにすなく

声悲し。

。蒼水也深し、野末にすだく虫の
音の度毎に弱りゆく。

まのき、

たぐり

。竹叢に觸るる夕風のまよとの頼たに

。鳴く蟬すも鳴かぬ禁の身と

佳すもすらに、聲あき、哀の深さ、

に較ぶれば、依倚立ころ虫胸の

清瀬は秋の影あふす、まゆや

心あき、常と春に遇へば笑ひ、

懐あき、虫も秋に感ずれば泣し。

。秋山の胸は霞糸の乱れかぬく、或

は根み、或は緑ひ、或は迷ひ、或は

秋のあ、まははま、
短きとは還

り、念と不測の妄想、

くわいの節

。名にきにし、まのりにおた、まのりや、
まのり

たる百千の文に、今は我には、
まのり

から、
まのり

短キー、まのり、
まのり

思ふと、まのり、
まのり

笛や、まのり、
まのり

まのり、
まのり

知れ、
まのり

まのり、
まのり

まのり、
まのり

まのり、
まのり

まのり、
まのり

まのり、
まのり

まのり、
まのり

まのり、
まのり

まのり、
まのり

まのり、
まのり

よの世の記に玉すら一女子の身、今

日は何れの汀に舟し、日は何

處の岸に崎かたやせん。干菓

ちう我の又は濤みも了らむ捨を

やうた、さきふ 枯心は桐一葉の。

意と疎きがらんも知やう。況しや

すむよか舟の 波も顔は、浮たる

色と寄らる世の中に、とも幾びの

人さびしけん。

待ししはし、眺るにともはつ荒し

大海のたりも人知ふぬと月大珠す。

外には見えぬ木影にも情の霞も

痛すらたあし 例) すまき舟のぬ

世の音何しは、善らうけ、悪らう

らうけ、人毎に地には例がゆぬ有女

は何れもをかし。

（夢）ハカ
し

。とはありに暫時は空に暇をいふ事

の禮、軀を器と用ちてつくし

る誠しむるを想ふ道なき哀れに

つらふりし思の致す、さすあふ

世と隔れたんなく、今更何

暮せし朝々の如かりしと誓ふか

火ある計り。夢をと思へば現れ

平の陽炎の影とも消えやらう、

現かと思れば、夢すくも高き

此書社の怪色、例へば永く

に女性を失ひし人のやうに震

ひぬし 龍んは只 恍惚し 果

る計りあり。

舟お

金凡 練ろにまかりし。ハトシレ

つねの静けさ、眠れぬあはれ、

船は流れをよりに北すゝるらん

りとも。月夜をうら、境野の

波の身はあまら。月夜に、

は、ライシンの城工 歌く せりこたすの

邸宅のシントンの真蹟にすう、老

樹の琥珀潭にまらじ、後本に昇る

の日のあまら、夕の、鐘の、時本の

静人すう、老樹の琥珀潭に、ま

望んて、築木の上らの月夜を

すう、

。袂すずりしき、秋凡か、捨るるに
。来る。ハトソソク河の畔けさ、は
眠れらぬ如く、さうして、船は流を
上り、北に、と、進むに、隨ひ、
景色は、空を、斬り、轉じ、
群想を、する、こと、と、又、船は、
波を、さぐり、影の、中、には、
。の、城、を、凌ぎ、す、る、さ、う、さ、い、
。ンガスの、邸、宅、か、ま、を、磨き、し、ら、
。ンガトシ、高、く、凌ぐ、に、経、年、え、る、
老樹の、影、は、
。に、昇、る、る、白、雲、あ、る、岸、も、さ、う、
崖、下、に、影、を、湛、碧、に、映、し、
る、影、に、さ、る、。一、葉、た、う、命、舟、に
驚、し、大、公、望、を、取、の、精、人
さ、う、ん、サ、ッ、パ、リ、し、
。ほ、り、ユ、ロ、ネ、ア、ル、式、の、あ、な、ま、
。住、宅、

所々にあらた。錦をたう垣金

野をまきり、林に隠れ、山に現れ

此舟に渡りて、さまたけらば、丁度。

一舟の紐をゆき、江畔に清を

繰るをうらむ。ちのへきや

する村を、山にたひき、五んを歎

心する、船の後には、舟中の鷗

と、おのをいさるたう、舟の情を

り、情に、舟のたうの、感のうらむ

親らむを、ちと、叫はし

ちのうらむ。

。 1921年10月。 年終二書三十七卷。

か
きふ、とうしんんんん
と毎年の脈

と算のたの、たの、
と算のたの、たの、

とたの、まふく、早
とたの、まふく、早

十位まゝは算のたの、
十位まゝは算のたの、

又たの、
又たの、

んんん、心脈、
んんん、心脈、

うん、
うん、

と、
と、

を、
を、

ま、
ま、

スピリット、
スピリット、

た、
た、

は、
は、

痕、
痕、

ま、
ま、

所に説 するの如し。ノーマン

イアンサア 三 軒 呼んたか

石 事 あり。い。

イェバマイント。呼ははうくとも 聖賢

七、書一の 送 歩の 歩い、二程 申の

送者 ぬ せう 十 多 多 に 居 分 ぬ の ぬ ぬ

いん。と 自分 は ち ち の 事 の 何 と ち

と 事 ぬ の。 鹿 説 と ち け と ぬ の。

脈 は 治 神 く 早 く ち ち の。 そ う 鼻

へ る と こ と ち ち ぬ の 事 と ぬ の ち ち

丸。

此 の ち ち 説 一 と ぬ の 一 ち

申 傳 ぬ 事 密 ぎ 一 ち ち。

カ 一 ち ち ぬ の。

お ぬ の 申 世 説 に ち ち ち ち ぬ の。

急 心 心 脈 の 事 ち ち ち ち ぬ の。

名 或 は ち ち ち ち ぬ の ち ち ぬ の。

壺系、空幸(若)び、由らしむ

長命草(ん)に(と)祈(る)る

左様(た)ふ。此(の)様(に)さうしく。

十日(日)

中(の)條(を)精(を)振(る)

中條(中)精(中)一(中)振(中)

皆(一)通(同)様(の)カ(ー)ド(と)凡(そ)

表(に)一(枚)書(き)を(ぬ)き(手)

西(展)の、(ま)の(に)て(し)の(に)清(く)め(さ)う

も(た)あ(ら)う。

今(一)、(ア)リ(入)の(事)を(持)つ(て)

この(お)と(一)氣(を)儘(か)に(持)つ(て)

と(た)し(て)い(ふ)。と(ま)り(ぬ)き(ま)す。

ア(が)え(す)、(そ)う、(二)半(半)ま(と)り(ぬ)れ。

お(の)り(に)ま(ん)じ(り)限(り)の(心)配(を)

と(あ)げ、(九)十(年)と(あ)ら(わ)る(の)

は、十二分の看護もしてしね
た。おのめうたうに、おれは左
日すもまきくのひたのん。

高小標中
六八

。女子集しる柔順たうん。

何ぞ其つの解らるん也。 睡眈の怨も

涇本には執念の深し記憶し復讐
せやれは正まさる也。 涇をよこ控に比し

このは慥かに其の事相とす
せら也

。涇水軍のし知の整ひあり也

何ぞ其の解を解せやいさ也

六八

。涇水軍のし知の整ひあり也

何ぞ其の志の之解しと有るさへか

さるる

六八

源太の軍の一の敵の勲をたつたか

何と其の陰険耻と知れざるや

とせ、

。世子微^{めい}りて世に此世世何に親^あい

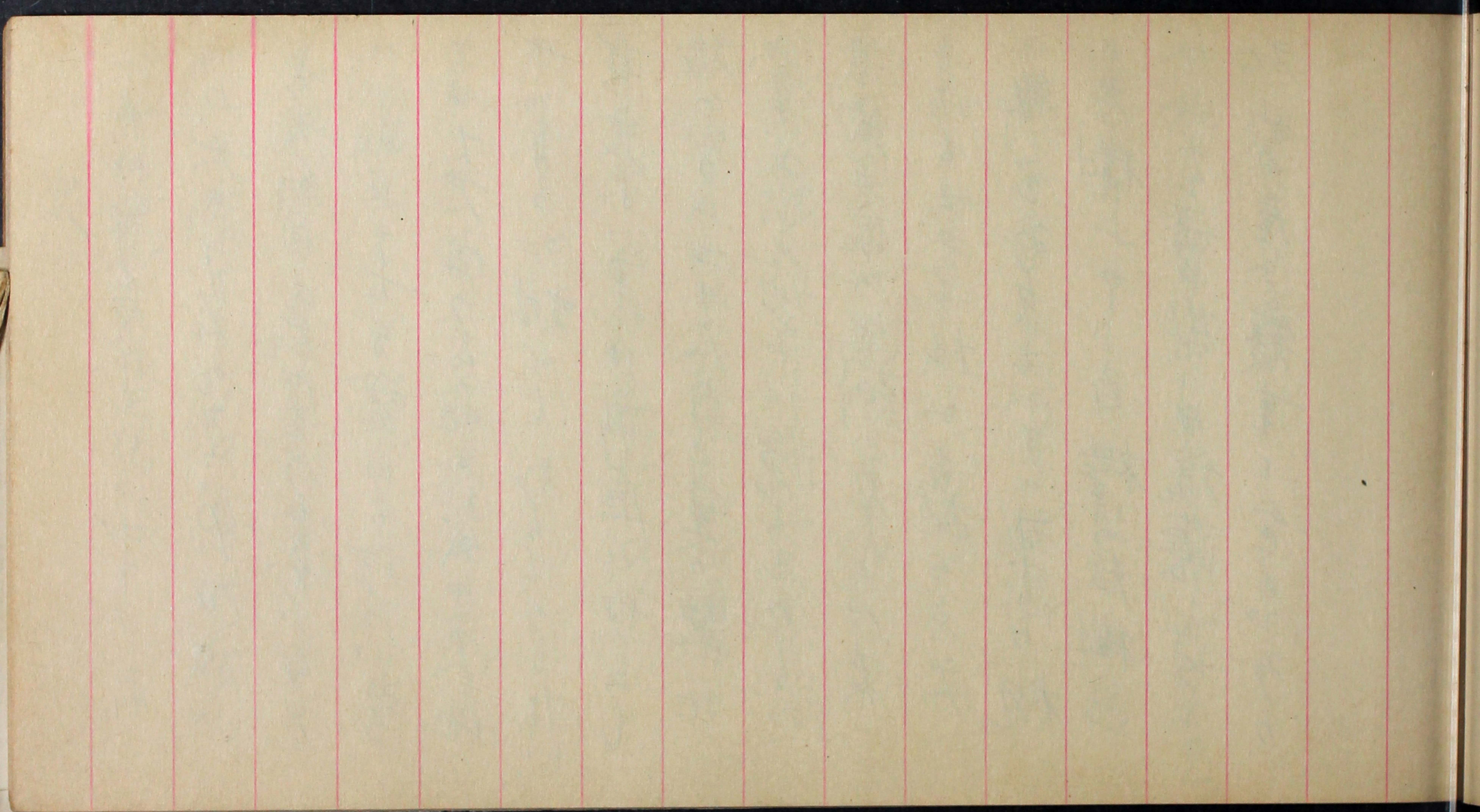
かり存^{ぞん}ずや。哀情美けりもの

有^ありて、この所詮せるをみ^みに

何處^{いづこ}さるある。天にす^する屋、

地にす^するは是れたるもの、人^{ひと}の

はゆき^{ゆき}にれ^れすや



岩

和山の静寂を感ずる。ポーチの所
 ルは、大キ、山石の多し。大阪域に
 秀吉の用ゑた所のもろい。目力
 にすれば、千石方、月も、何ら。其
 さは、十尺、徑のしうたか、幾千人地
 下に、ちるか、詰れも、知らしうもない。
 其、岩の、中は、崩、庭に、突、去し
 後の方には、二十人、けと、東の、路、地
 に、穴、あし、地下に、隠、あし、やら。
 其、岩と、穴、う、中、同、には、は、わ、か、人
 も、何ら、ス、カ、ト、松、の、直、道、々、と、天
 と、繋、ご、み、ら、ち、チ、の、棟、々、は、杣
 の、老、樹、ニ、中、に、自、持、の、巨、樹、ニ
 中、つ、ら、と、夏、期、には、緑、蔭、と、ぬ、り
 和山の屋上、寝、室、と、包、ん、ひ、み、ら、り、

紐子の十人

紅葉は散るに山に見るの如く阿の世也。

實は甘くもしく、中歌謡中橋

心着てゆく連者を何事も構はず

ことわざありやあり。

柔白の美は秋風すまじく不

景気は源刻と有りすたのいふ

脆諸多人如とん有にか、お困りの

こと古と、不及有のみり少思し

飛すあり

考れん又、南京の均存の異義を

改心附するには好意のさすらん。

未の能りのはききりあふ

野人の情をいへは身玉に到ん

の世は自らもせん。

大抵はと云ふこと。警備隊あり

裁判あり法律。する世の中

に強りかきし。腕づいす

と決するものは。悪心の無理、失

張。分たま手。變にあらえ。排日

煽。符を喰ふよ。満州の祀

ける既得権。と擁護する

す。妙ありあり。むせう。

亦。権を治る。ありす。先私

は。其の心。他。意。心。ありし。静。美。心

を。し。治る。ま。う。帝。國。心。は。常

に。漢。を。治る。感。謝。の。心。を。治る

し。ま。う

帝。國。の。心。を。治る。漢。の。心

を。治る。漢。の。心。を。治る

昭和十一年四月

十月五日

初霜降

十月十日

初雪降

初雪降のころ

やうに白くたるとは。 驚えと

しん家外と見れば。 山石の上

に極し薄か。 一かた。 隣

の死。 樹の周囲の草。 上は

と目大。 白くたるとは。 融

解い。 氷。 草。 上。 氷。 融

つ。 氷。 融。 氷。 融

氷。 融。 氷。 融

融

Blank Blue Parisit ^{F. 76-} Parisit ^{F. 71C} tunnel
Parisit - Blank Parisit
^{F. 75-} Parisit
Blank Boat (3 cornered)
Fox Fur pieces - Blank
Green pin nail handle
Bag - Cuban coal
Shoes -

Blank blue muddy
Parisit - shoes button
muddy nailon hat -
dark blue cloth -
white trucking - and
tan shoes -

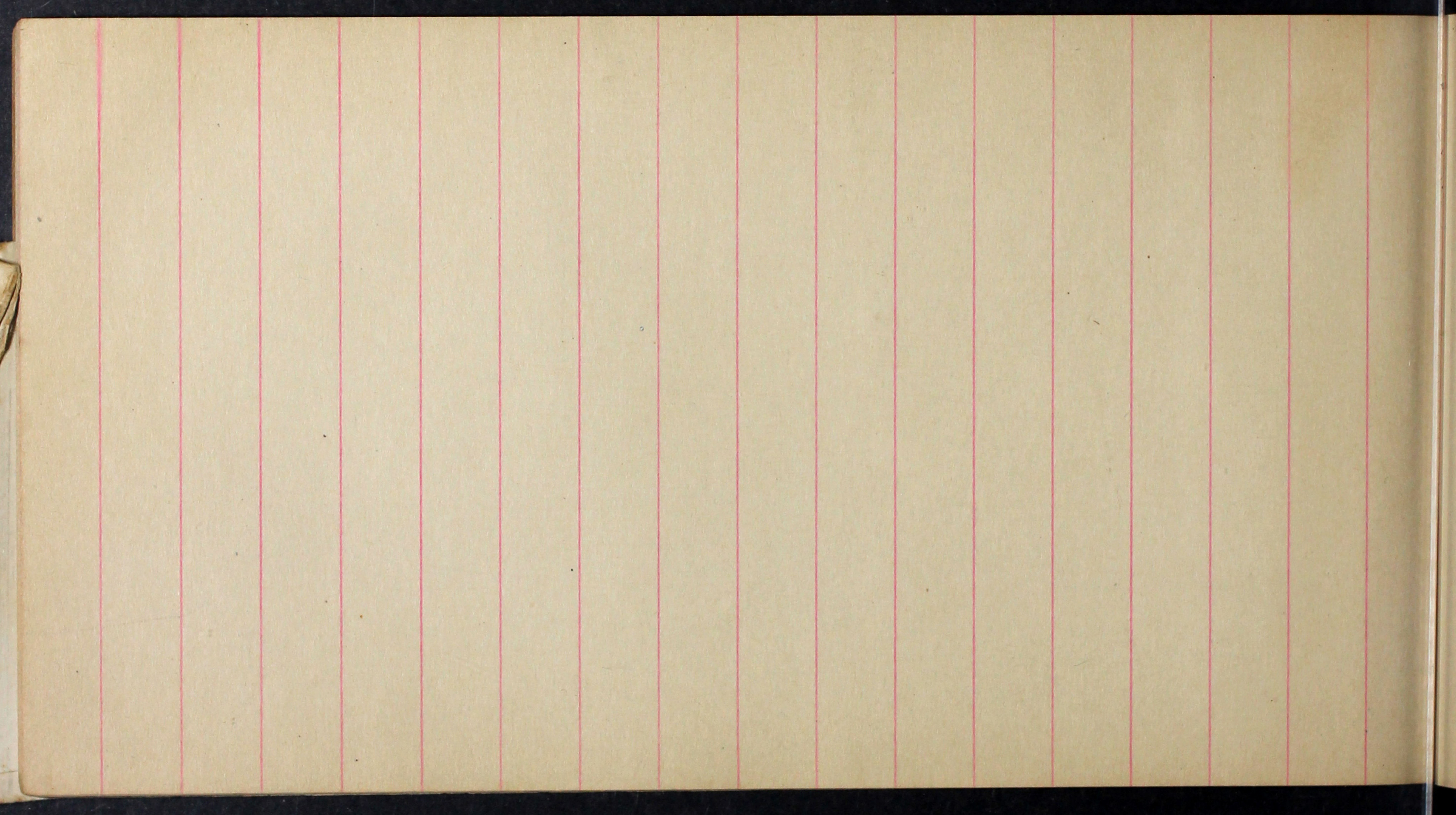
From Gruthes Lorraine

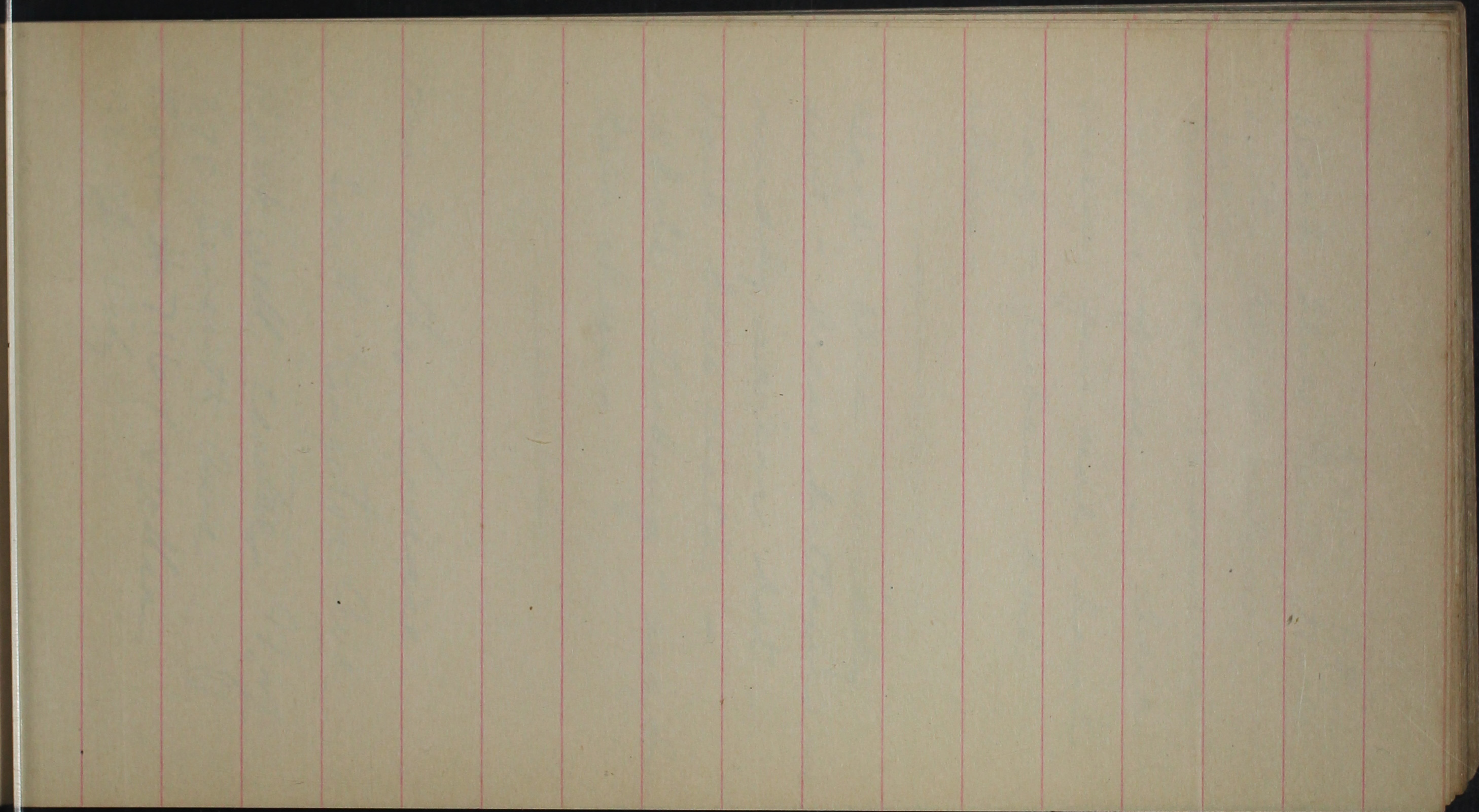
21 South Kingston Ave.

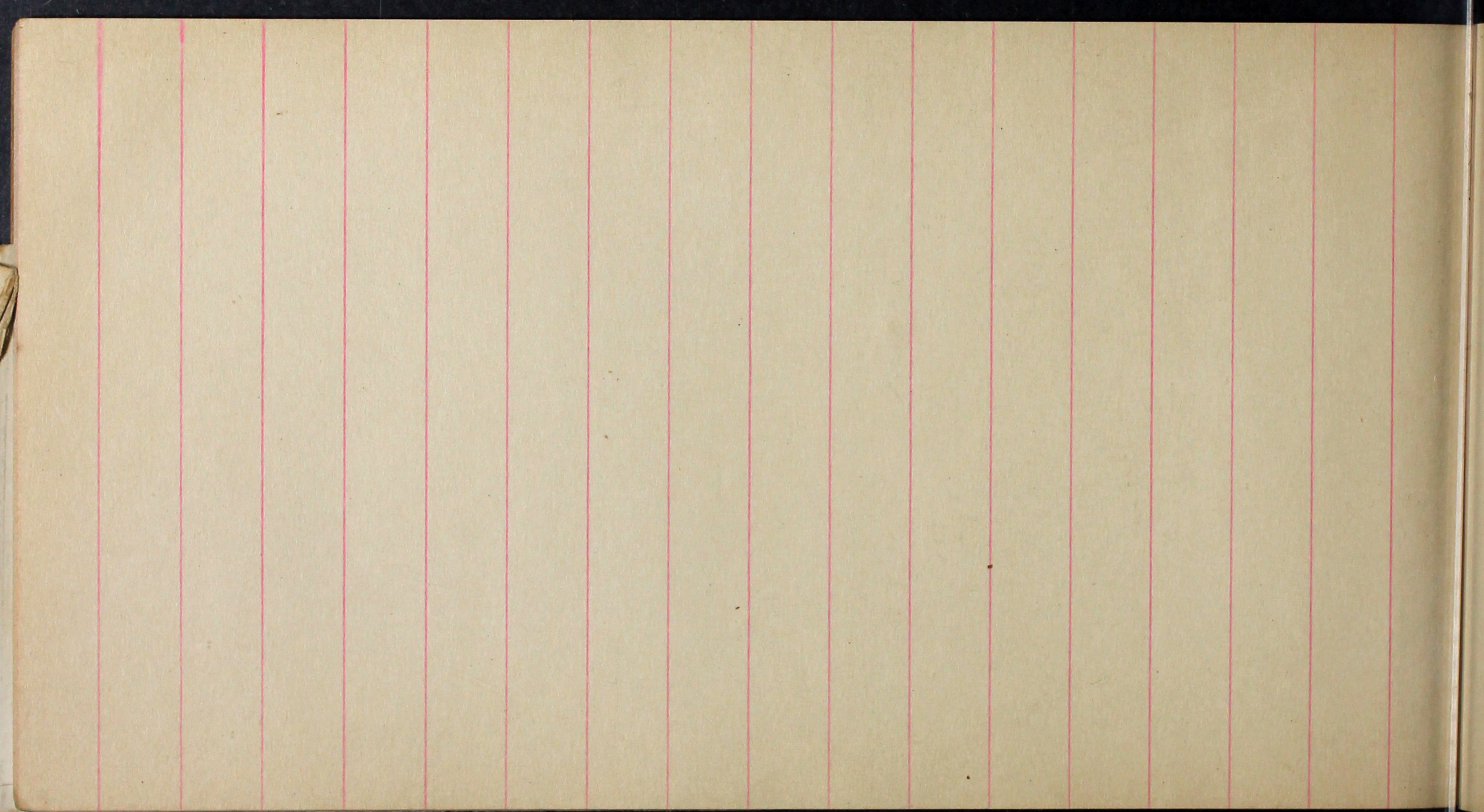
Rockwell Center N.Y.

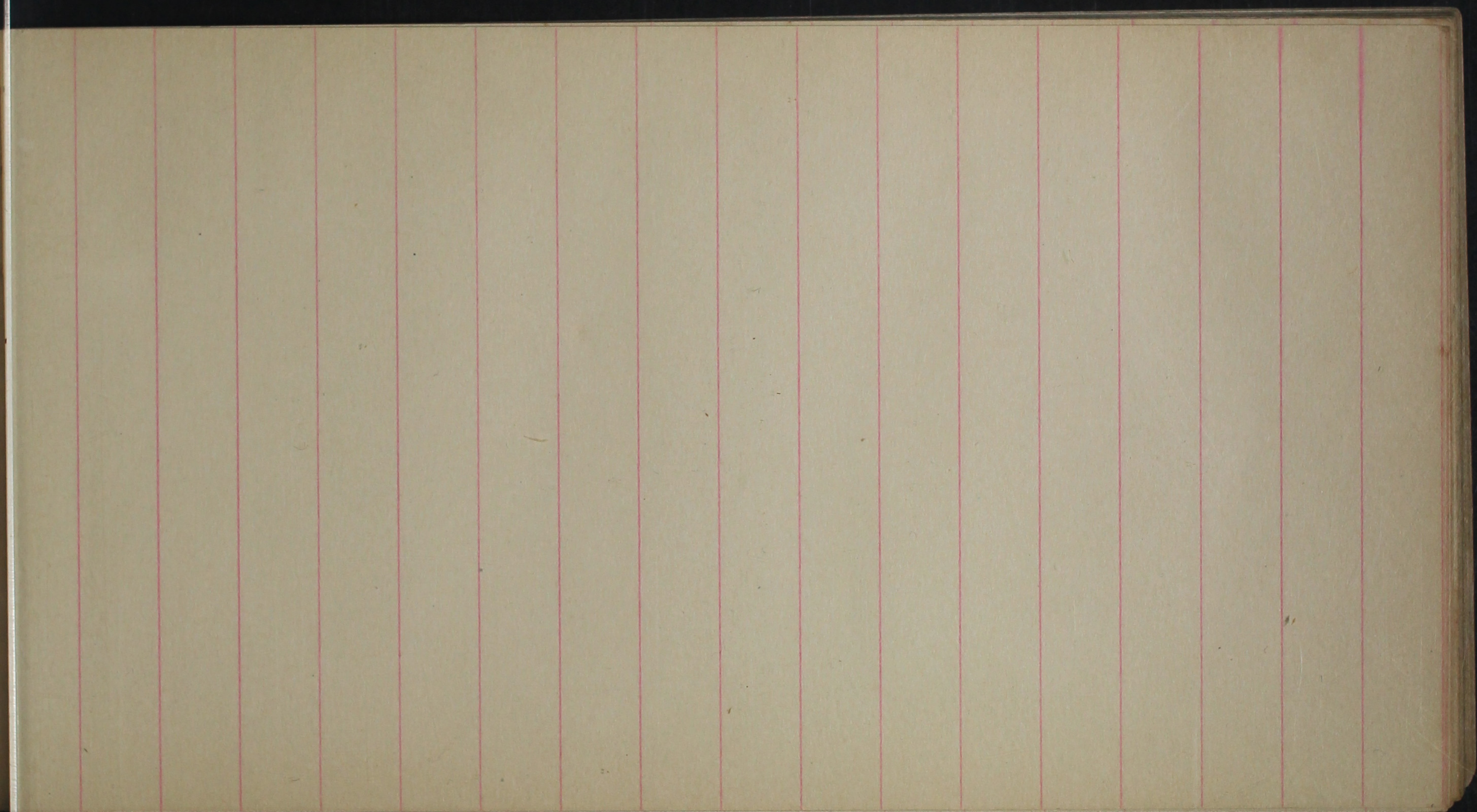
370 Seventh Ave

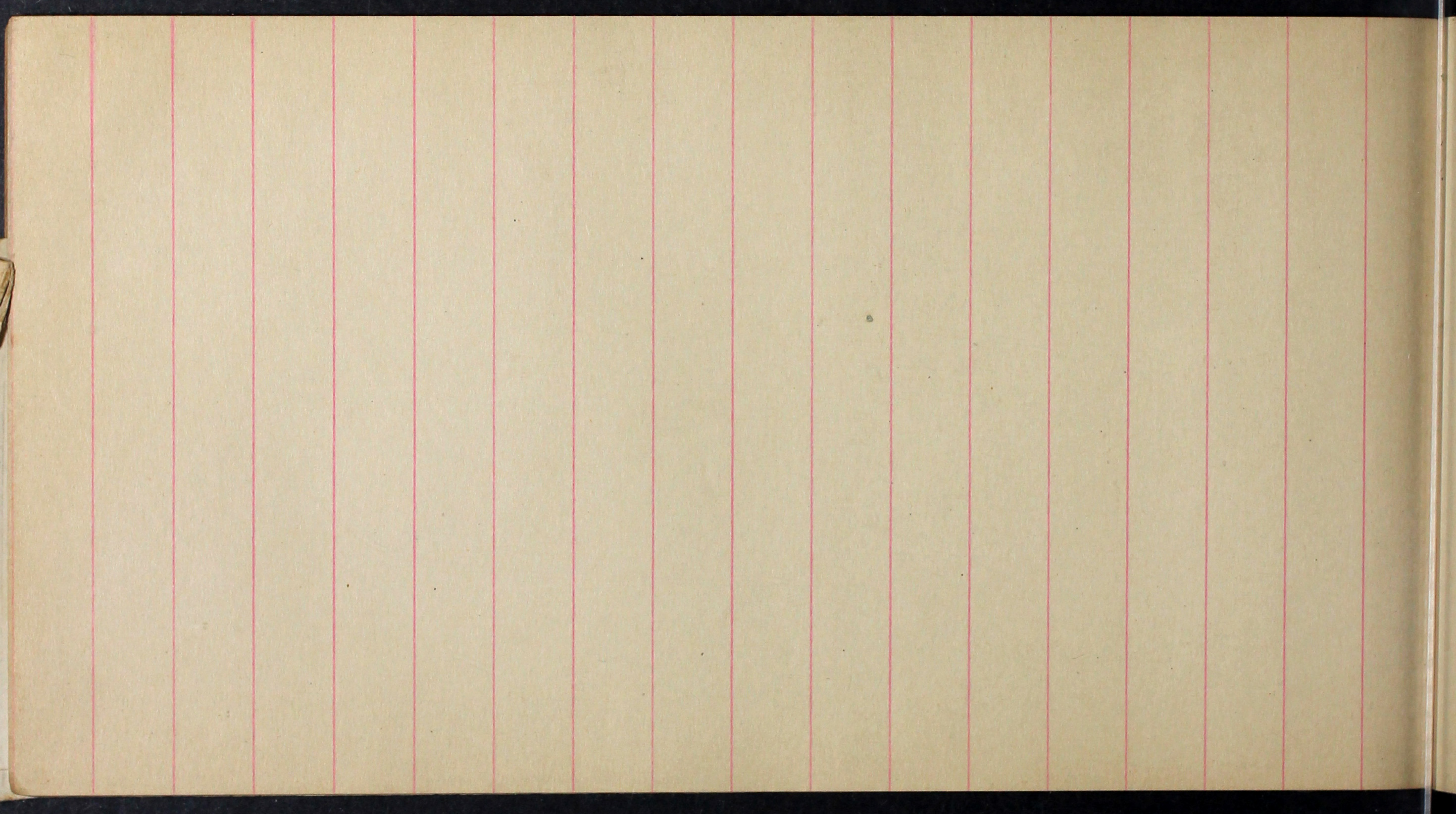
Room # 716 (Mellie
M. of City)

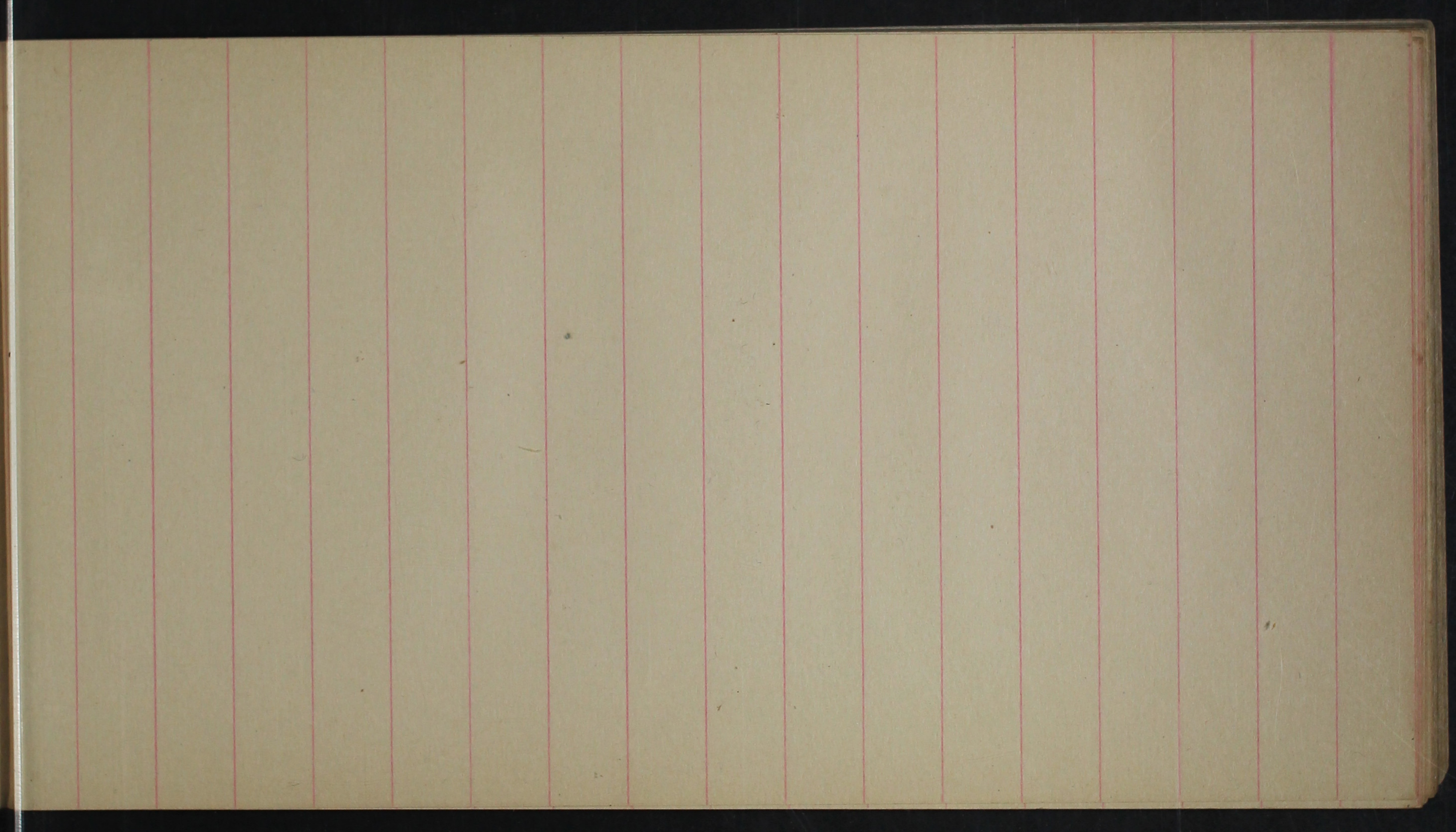


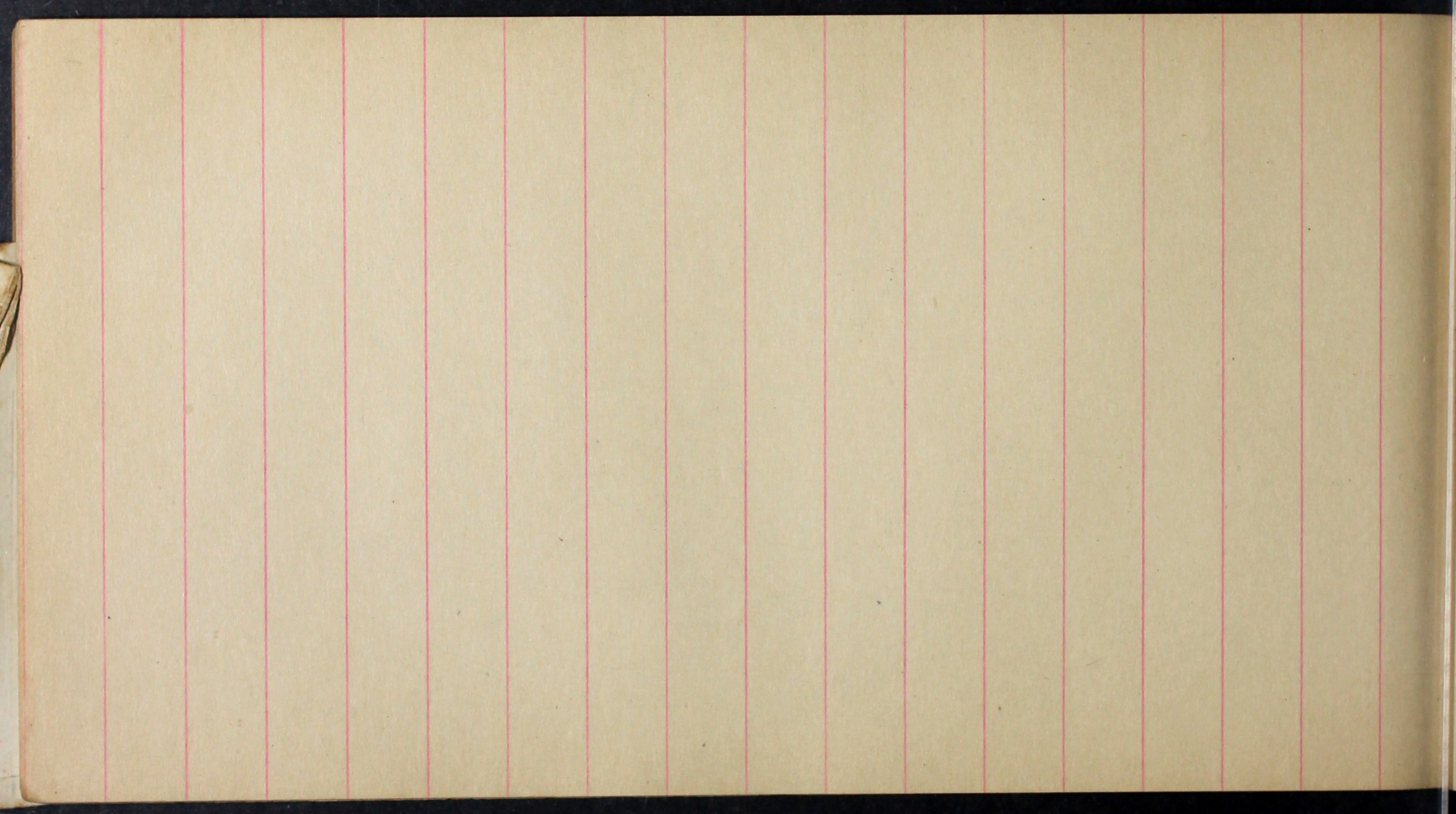


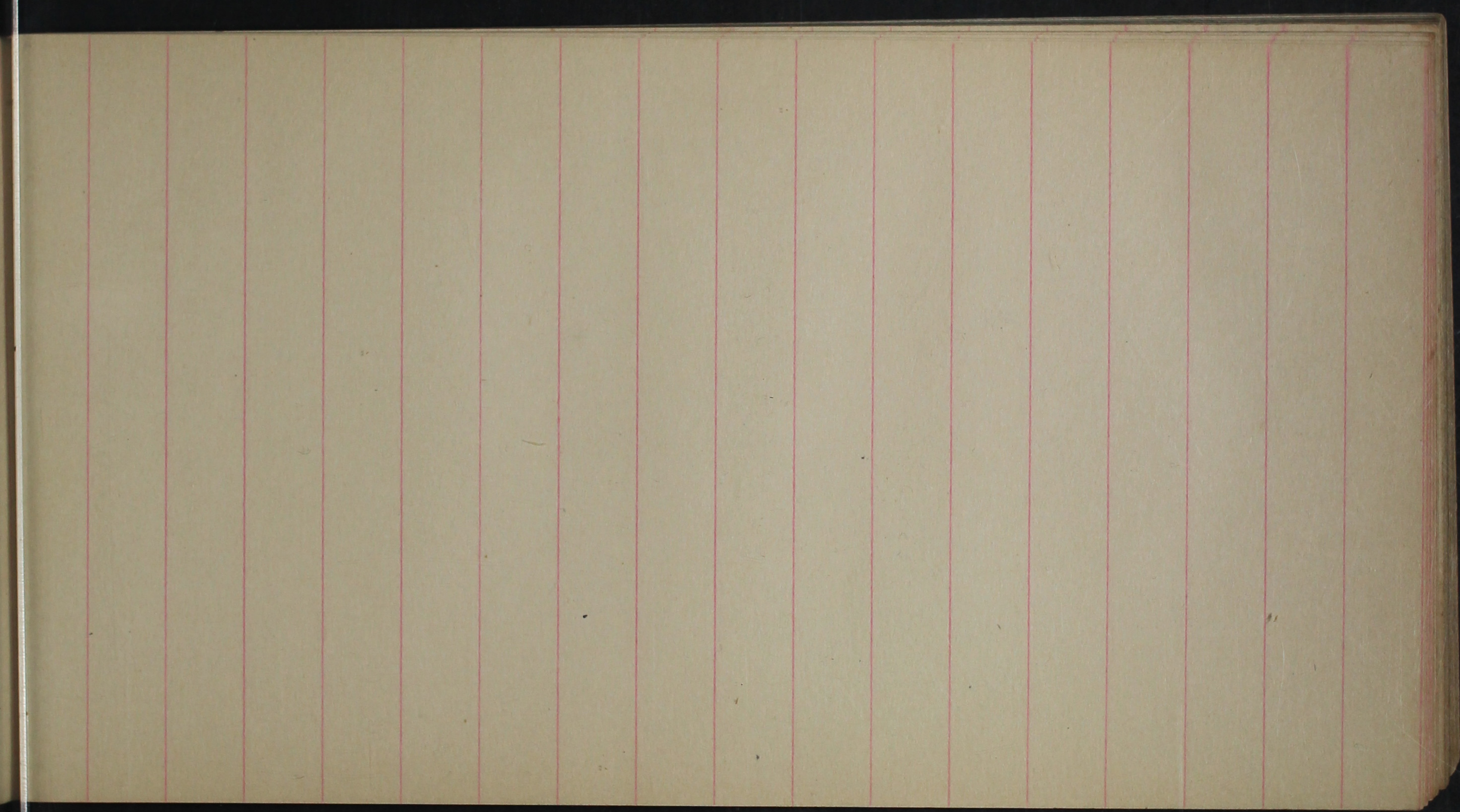


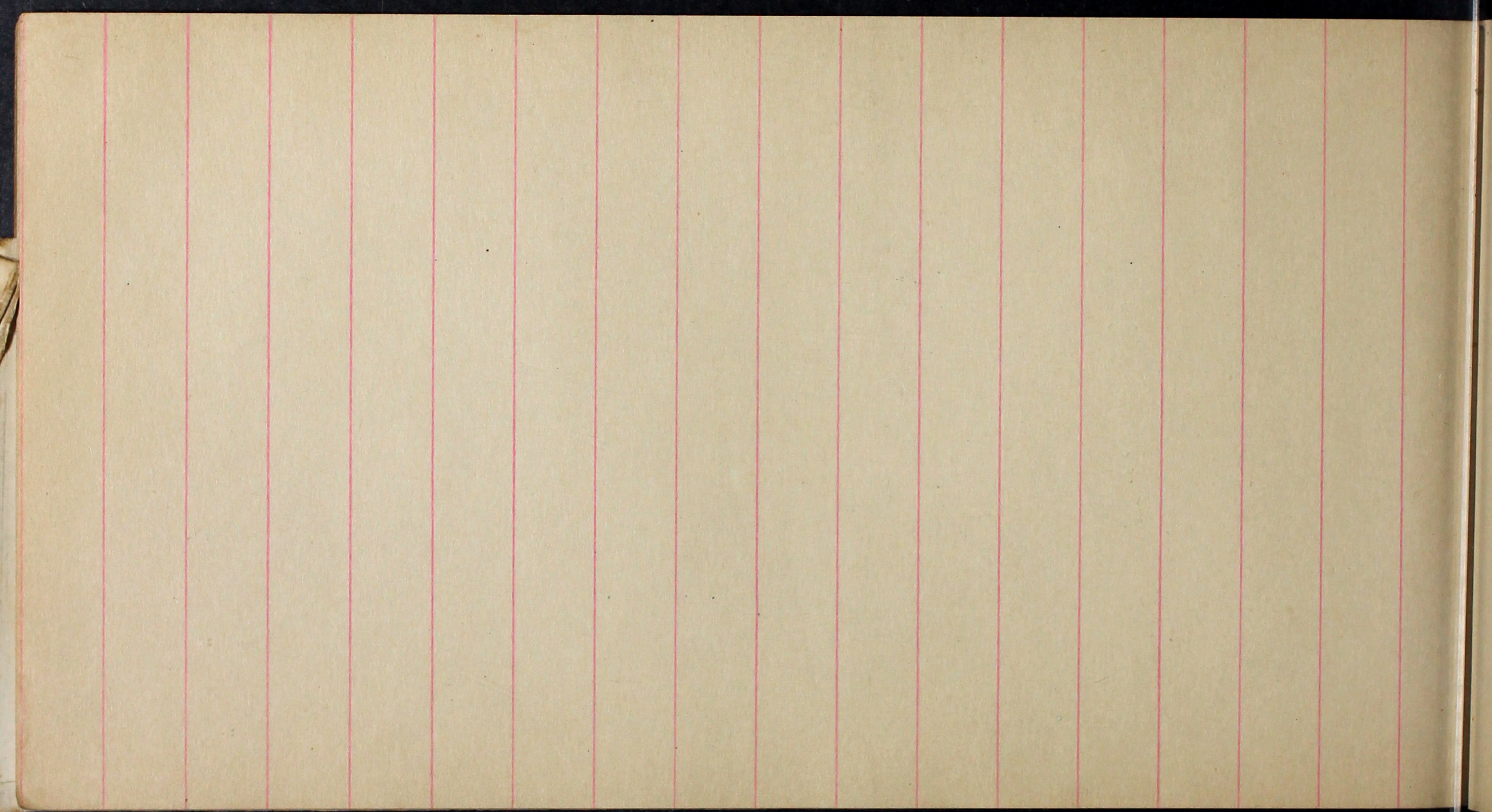


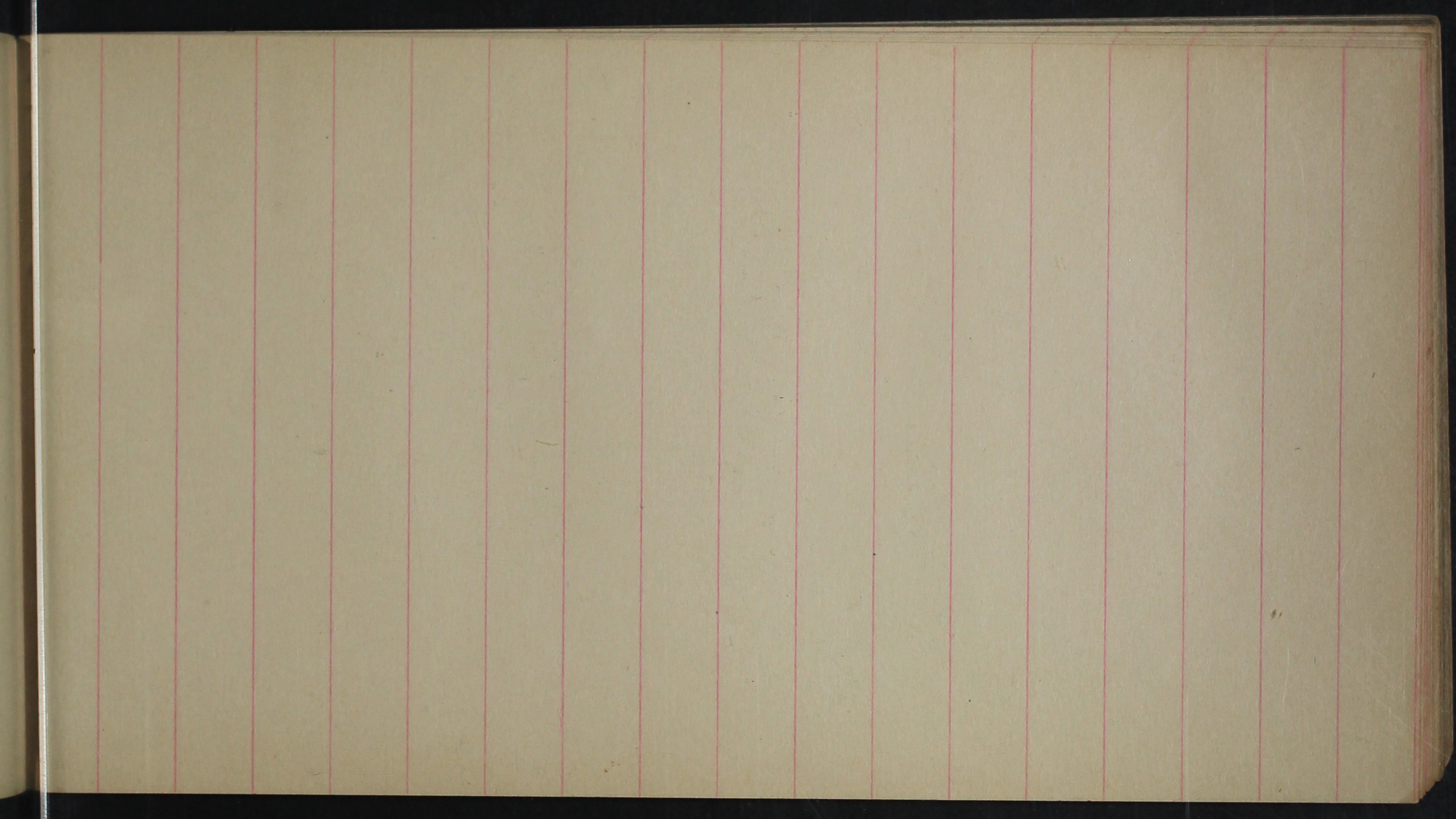


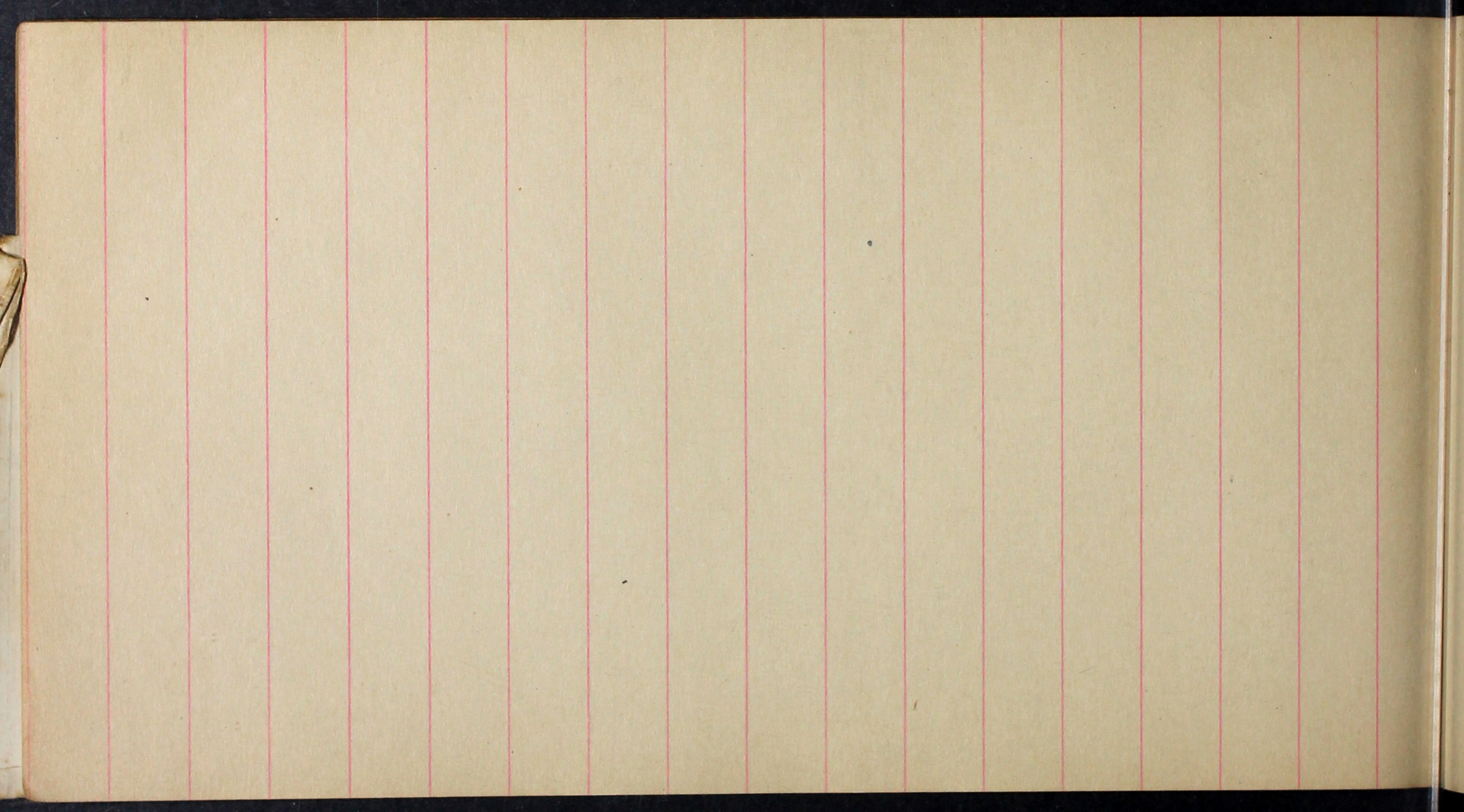


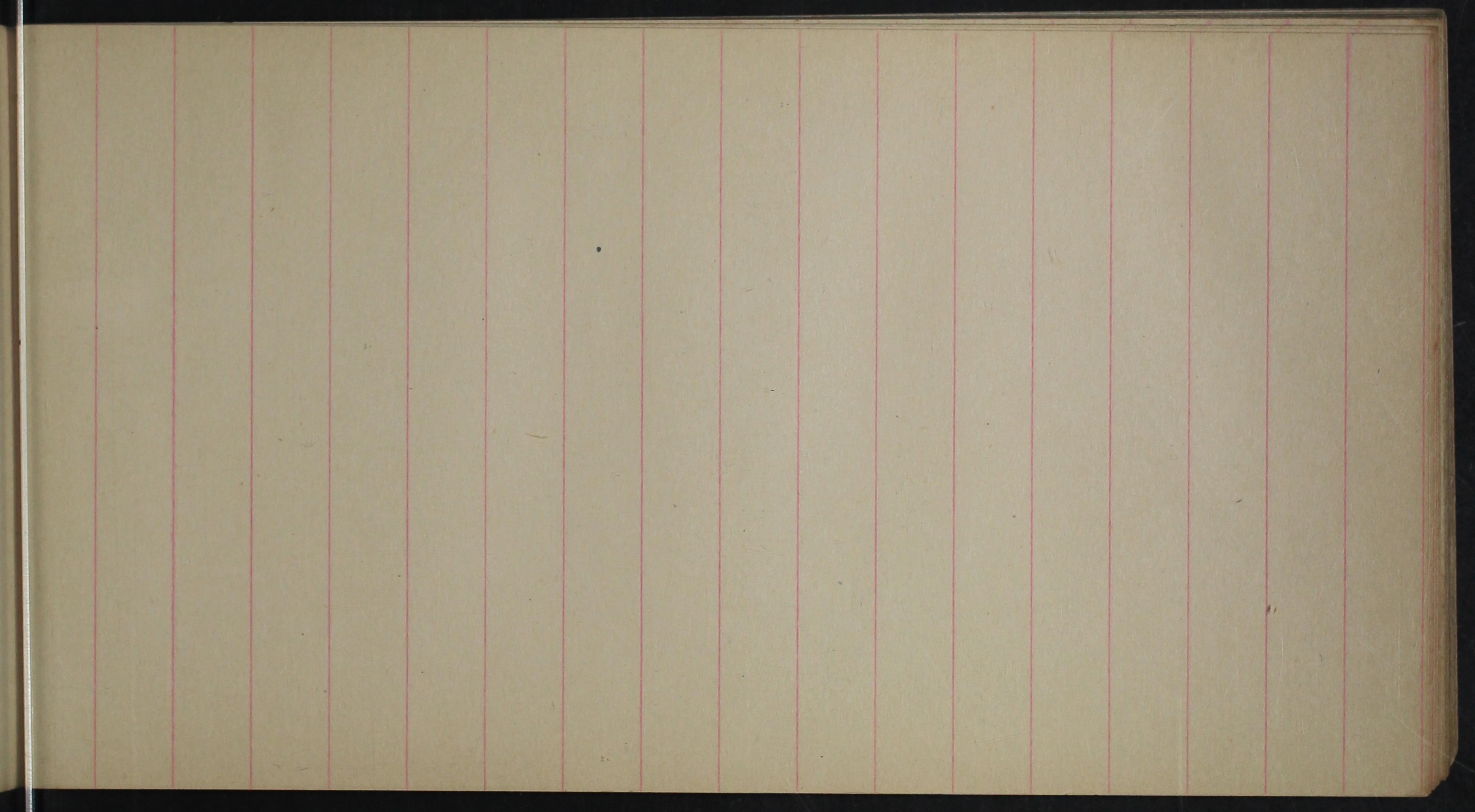


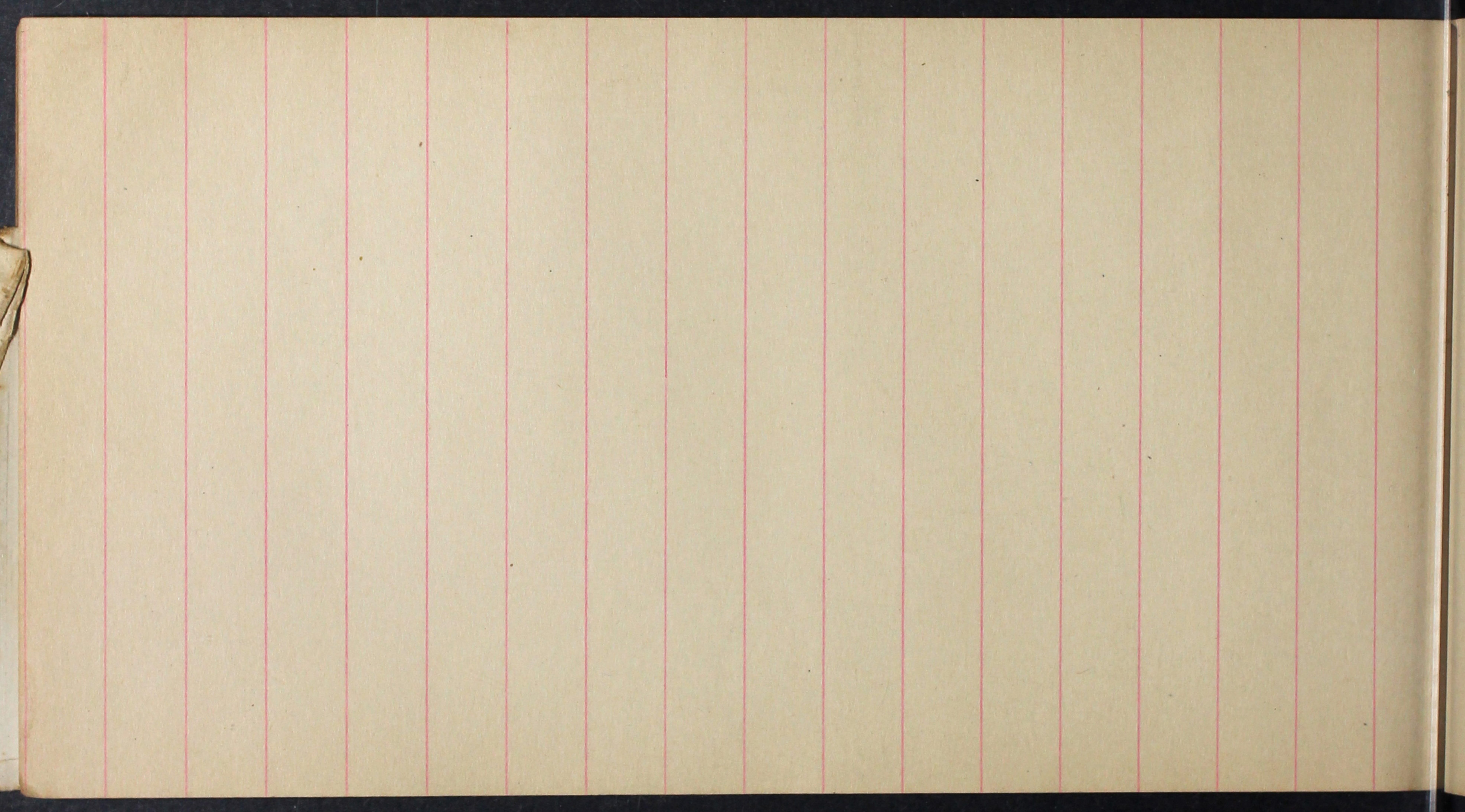


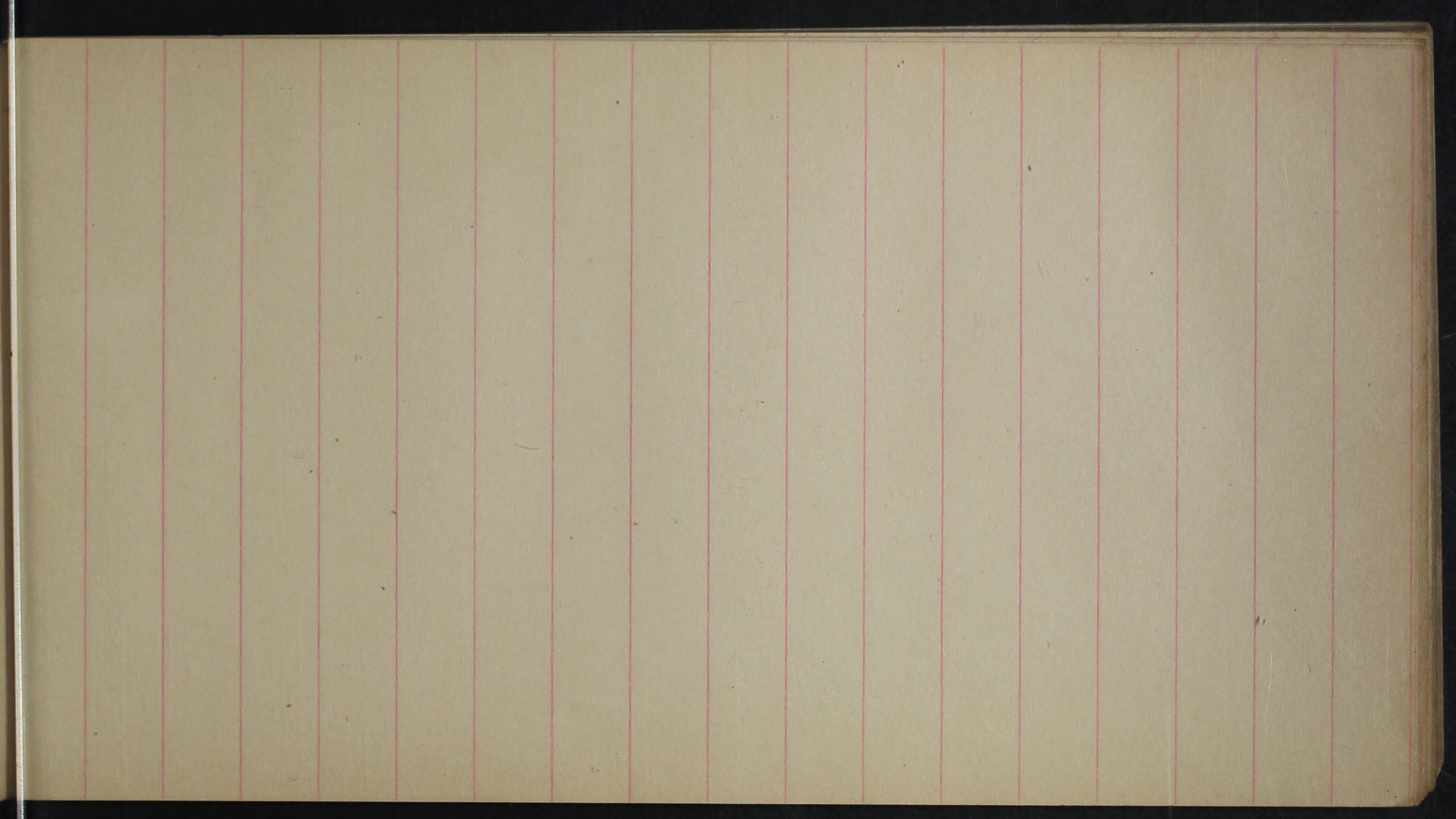


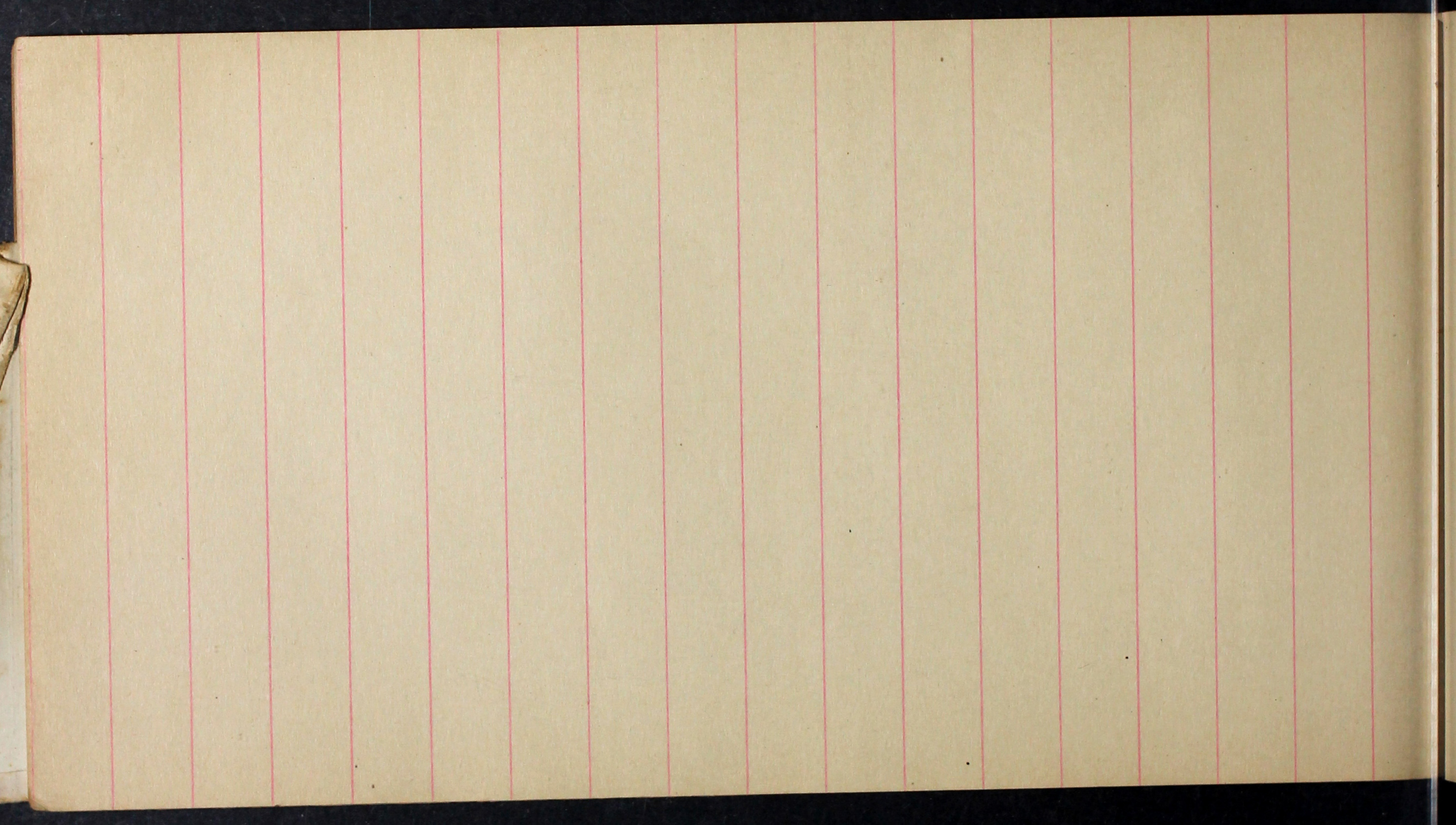


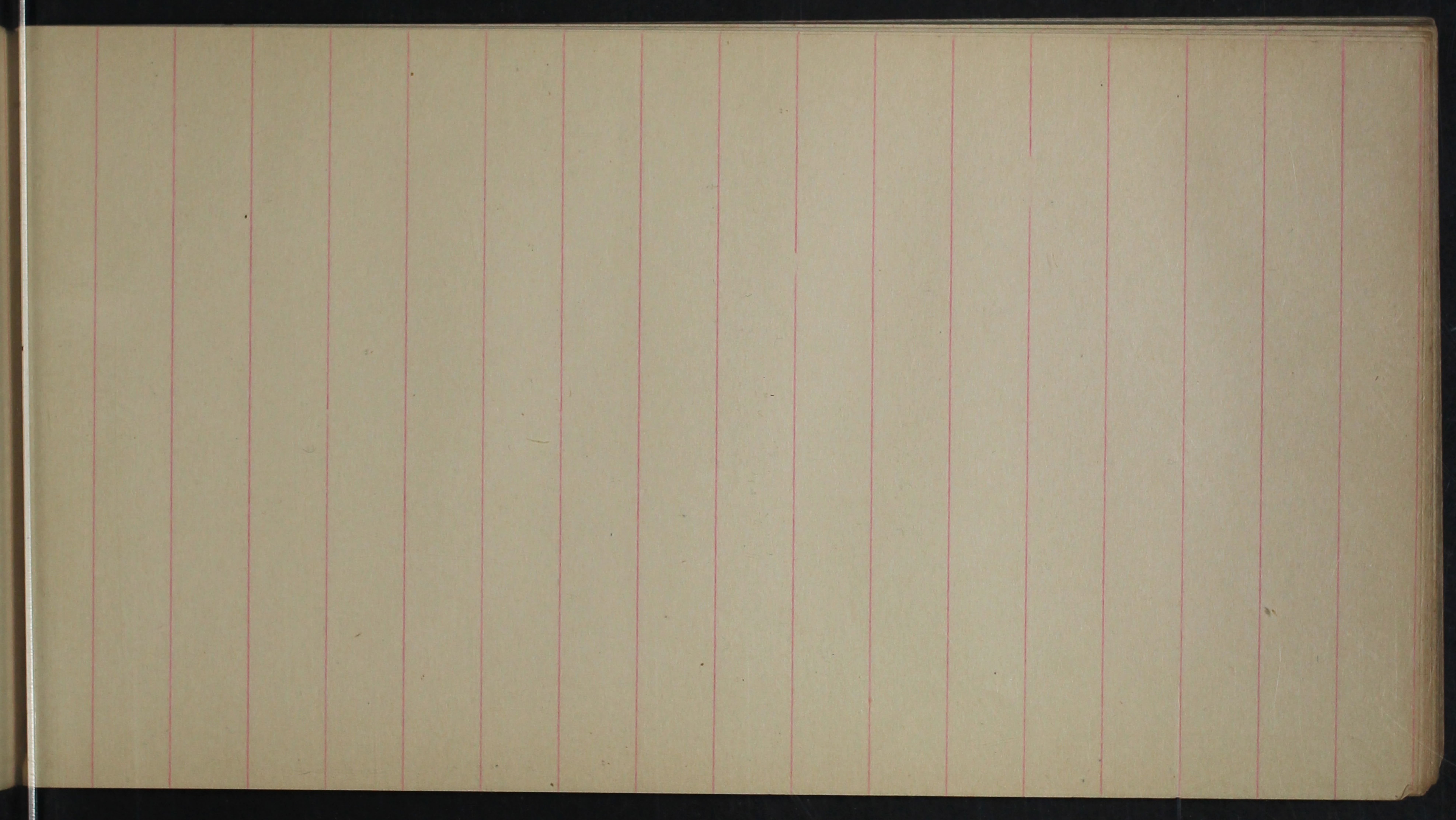


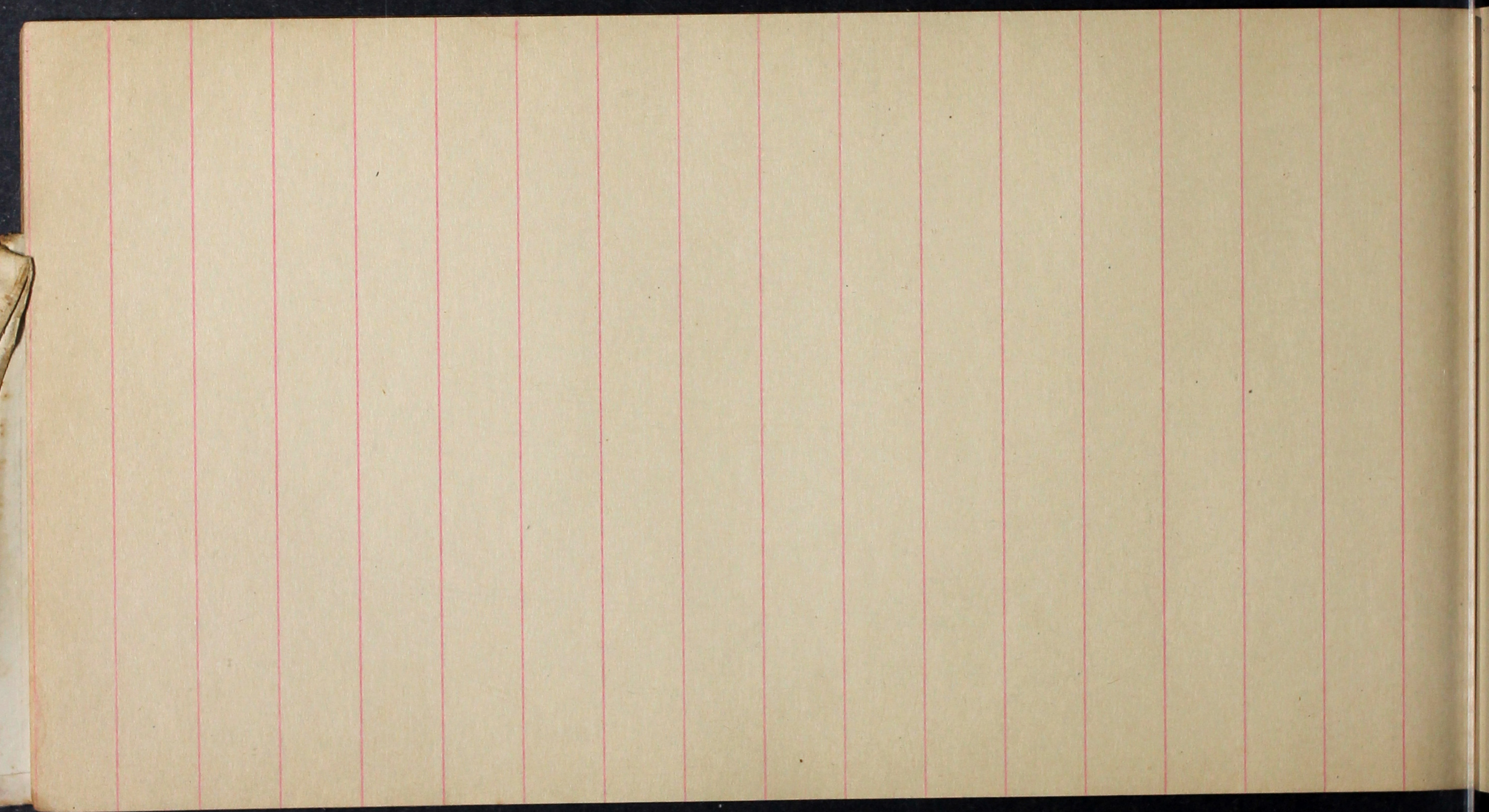


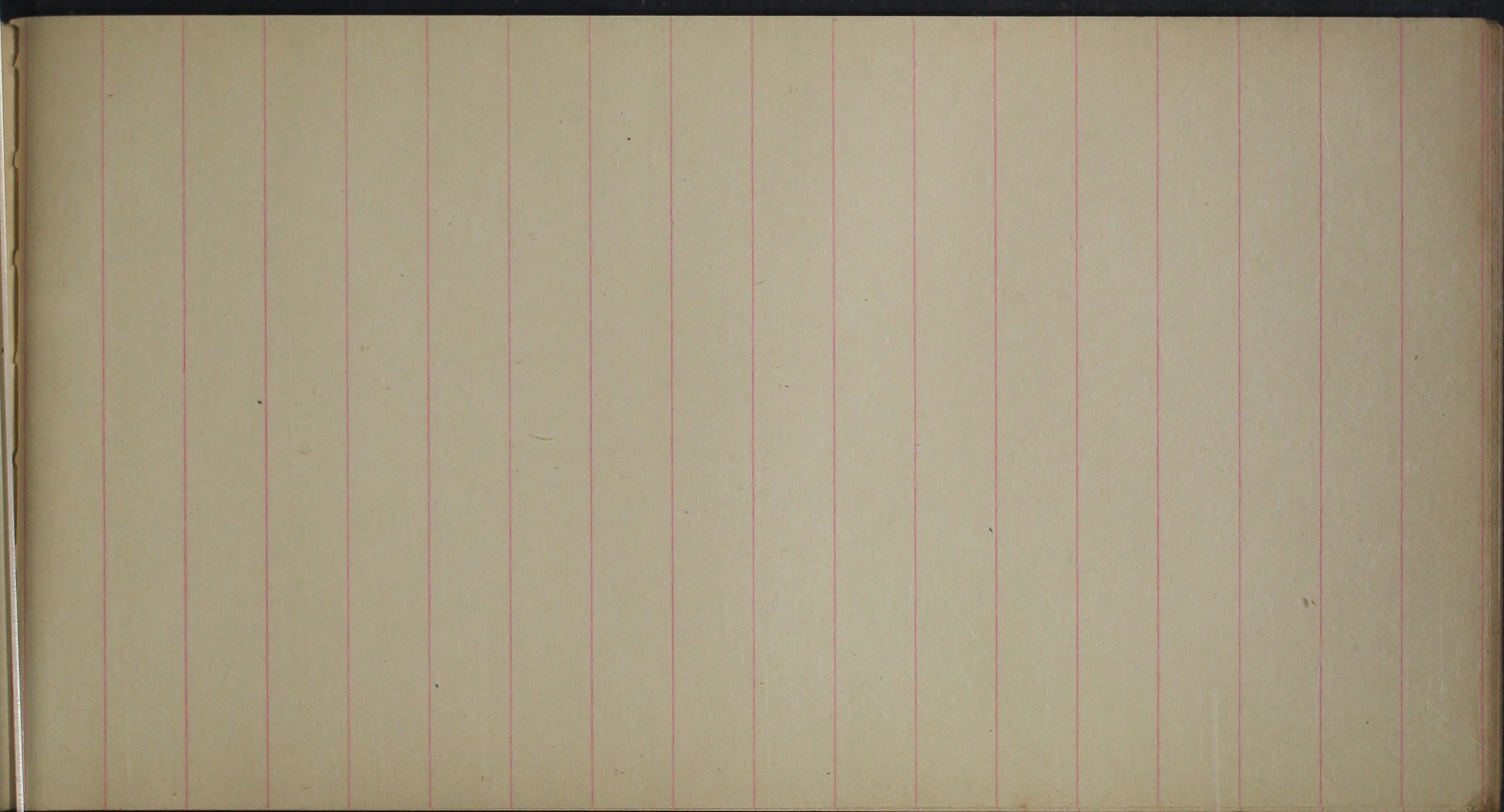


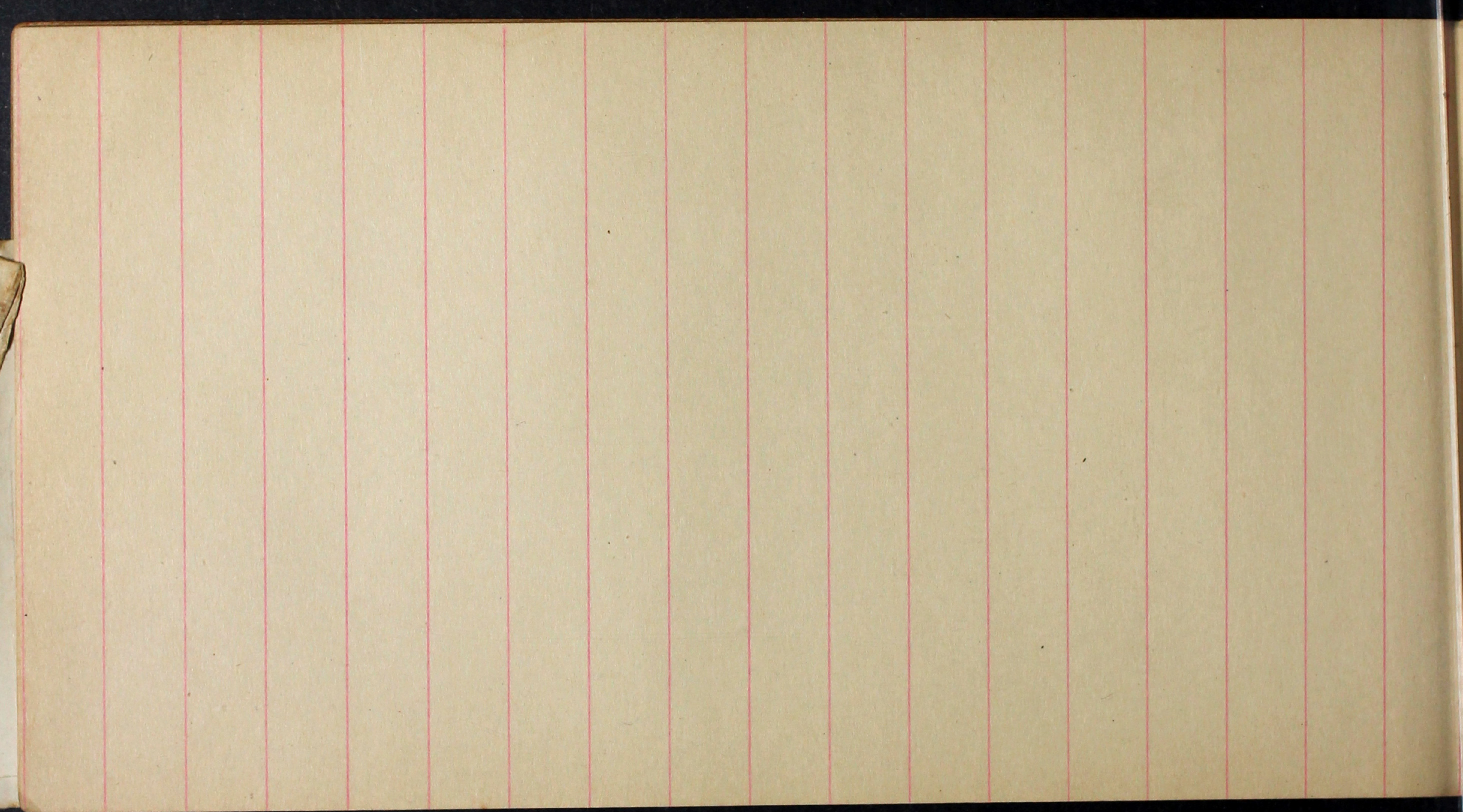


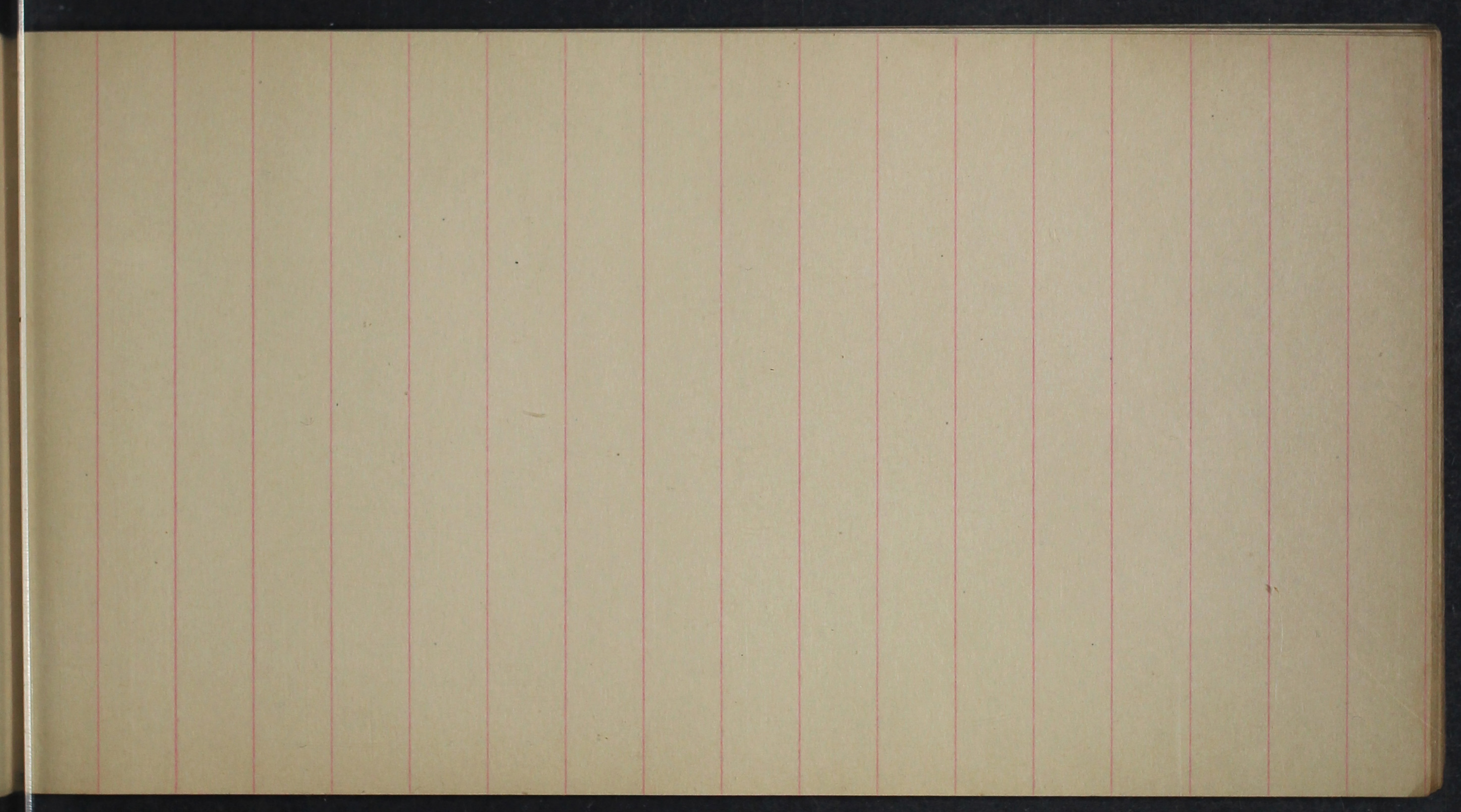


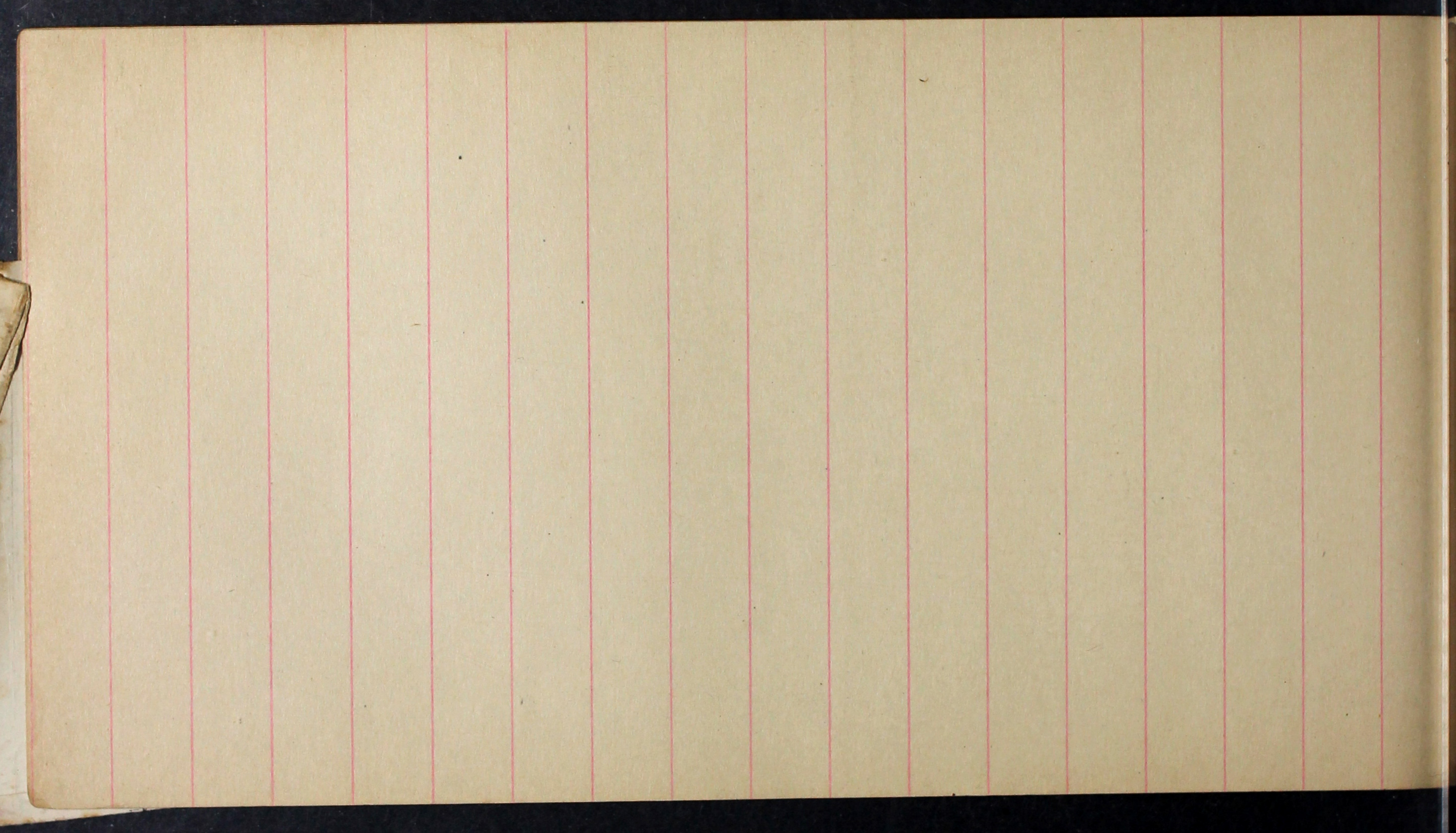


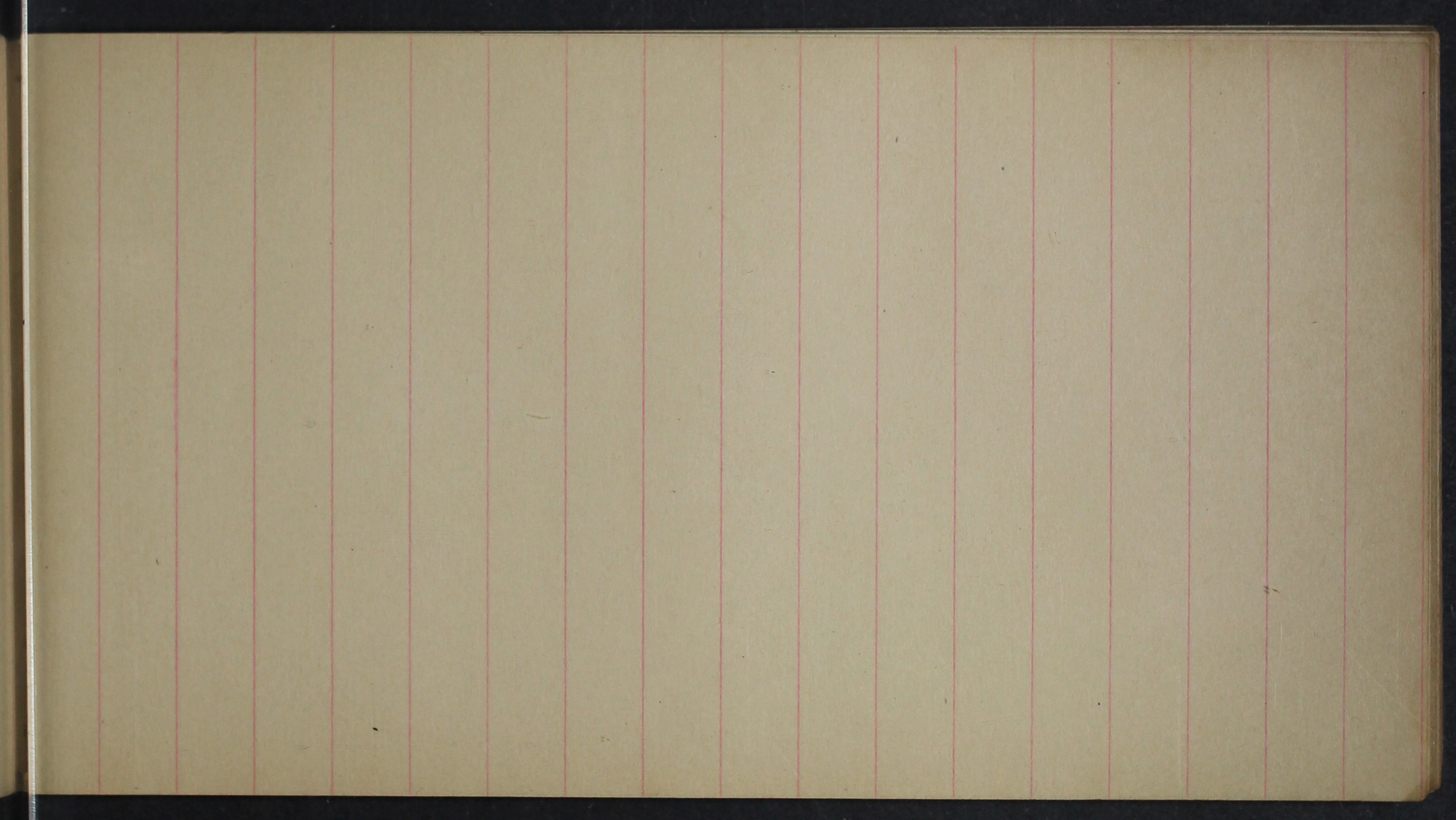


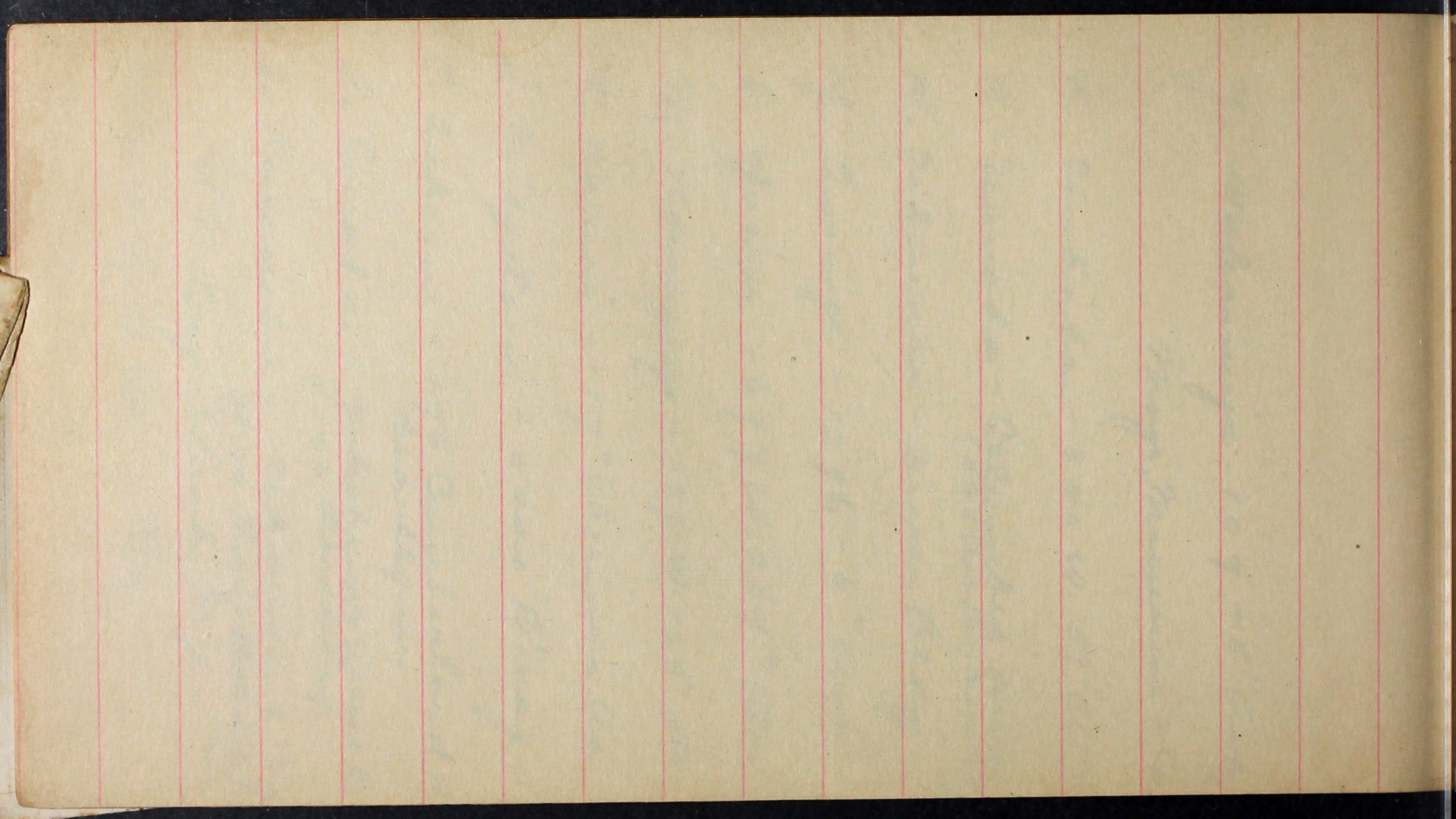












英德和法母金一二十七本

廣州州府

Y. Wakamaya - 109 - 5" Ave,
Mogi, Manover & Co.

X. Zuekadla - 340 W. 58" (215)

W. Zueoda - Columbia Univ.
(568 Audubon St.)

X. Zuekadla - Zinner Bldg.

W. Zueoda - 1296 - 6" Ave.

J. R. Yfawai - 677 W. 204" (215)

M. Yawagaga - 139 W. 123" (215)

J. K. Yawai - 117" (Pleasant Av.)

A. Muidgutani - 5000 Biny.

J. Zuekadla - 176 Zuekadla St.
Brooklyn.

S. Zueoda - Zuekadla (Pine) B.
120 Remedy.

Z. Zuekadla - Zuekadla Corp
35-10 Thirty ~~St~~ 31st
Long Island, N. Y.
city.

報月會人本日育紐

入日紐 會本育

月報

本年度役員

去る四月十二日に開かれたる第一期理事會に撰ばれし本年度役員

左の如し、
會長
副會長

高見 中山 須賀 水谷 鴨井

第一回定期理事會

去る四月十二日夕都に於て本年度第一期理事會を開催、出席理事

の如し、
赤木英道、青柳嘉次、江戶徳石、石井徳長、鴨井久、柏原光治、伊義一、小阪忠之輔、小刀榮、香西龍雄、熊澤義保、草信竹、眞野甫作、松永嘉一、水谷涉、三木定吉、村上柳市、中山武清、清水次郎、高橋一雄、竹中田中甲斐次郎、田中吉次郎、三之助、安井關治

他に藤村領事、二木副會計等出席

【一】

紐育日本會 月報

昭和七年
第四百廿二號

The Japanese Association, Inc.
Room 1812
Manufacturers Trust Bldg
1819 Broadway
New York City
Telephones: Columbus 5-5265-66

本年度役員

去る四月十二日に開かれたる第一回定期理事會にて撰ばれし本年度役員左の如し、

- 會長 高見 豊彦
- 副會長 中山 武夫
- 同 水谷 涉三
- 會計 須賀 義一
- 主事 鴨 井 久

第一回定期理事會

去る四月十二日夕都に於て本年度第一回定期理事會を開催、出席理事左の如し、

- 赤木英道、青柳嘉次、江戸徳治、石井徳長、鴨井久、柏原光治、川俣義一、小阪忠之輔、小刀榮之助、香西龍雄、熊澤義保、草信竹治、眞野甫作、松永嘉一、水谷涉三、三木定吉、村上柳市、中山武夫、清水宗次郎、高橋一雄、竹中重雄、田中甲斐次郎、田中吉次郎、山口三之助、安井關治
- 他に藤村領事、二木副會計等出席、

最後に草信會長は在任中の協力を謝し、理事一同拍手草信氏の勞を謝し閉會す。

市民權回復

從來歸化不能の外國人と結婚した場合女子は市民權を喪失したのであるが昨年ケールブル法修正案が通過し夫の國籍の如何を問はず國籍喪失手續を歸化法廷に申請しない限り米國市民であります。

- 一、米國市民女子は結婚に依りて市民權を喪失せず。
- 二、歸化不能外人と結婚した市民女子は歸化權を有す。
- 三、米國に出生したる市民は人種の如何に依りて歸化を拒絶さるゝとなし。

以上の明文によりて、ケールブル法修正案實施前、即一九三一年三月三日以前に結婚に依りて市民權を失つた日系市民女子又は日本人と結婚した米國婦人は市民權を回復し得るのである。其資格は

- 一、二十一歳以上なること。
- 二、北米合衆國、布哇、アラスカ、ポートルコに市民權回復前に一箇年以上居住せし者。

次に必要な書類は「出生證明」と「結婚證明」であります。出生證明は出生地より寫しを取るか、出生届

を怠つた者は證人連行の上で出生證明裁判を上級裁判所に提起して認知して貰ふのである。次に必要な條件は英語を解することである。英語不十分で市民權回復を拒絶された例がある。其他の手續やアップリケーションに關しては本會事務所に御照會あれば喜んで御答へします。

在滿洲帝國軍人

慰問金 (其二)

- 金二十弗 日本生糸會社支店員一同
 - 金五弗宛 出浦幸三郎 小野田宇一郎 市川祥弑 脇本誠一
- 本會事務所取扱分一千二百六十一弗 當地總領事館を通じて送金せり。

届書類注意

從來帝國總領事館に差し出すべき届出書類は在留民の多くが届出期限を心得ざる爲め届出を怠り反つて其の爲め延滞理由書等の重複なる手續をなさざるべからざることあり、依つて注意のため主なる届書に付き届出期限を左の如く示さん。

- 婚姻届 十日間以内
 - 出生届 十四日以内
 - 死亡届 事實を知りたる後七日以内
- 猶右届書類は正副二通提出すべきものなり。

第十九回定期總會

本年三月十九日午後八時十五分紐育教會に於て行はれし本會第十九回定期總會に於て報告せる昨本度事業概要(續き)

●共濟部

- 伊藤ダビド氏葬儀費補助の件
- 有川重雄氏葬儀に關する件
- 向井留藏氏追悼會參加の件
- 田中茂氏葬儀補助の件
- 金山軍次氏葬儀に關する件
- 安孫子ヂェン氏へ衣類給與の件
- 松本保氏死亡に關する件
- 岡末雄氏死亡に關する件
- 松島某妻女死亡の件
- 大隅晃三氏遺骨發送
- 和田進氏入院手續の件
- 金山氏、有川氏遺骨發送死亡届五件
- 病院訪問二十件
- 最相磯吉氏入院手續の件
- 折田直吉氏葬儀に關する件
- 小泉繁昌氏葬儀に關する件
- 雜賀清二郎氏葬儀費補助に關する件
- 八島武氏葬儀補助に關する件
- 最相磯吉氏葬儀に關する件
- 川島仙吉氏葬儀に關する件
- 田部庫吉氏葬儀參加の件
- 澤村平一、藤村道子、大岡明氏死亡の件
- 藤村壽氏行衛不明の件に協力

- 折田直吉、最相磯吉兩氏遺産に關する件
- 田中捨松(生存者)澤田馬之輔の二氏生命保險に關する件
- 死亡届七件
- 遺骨發送、松本保、島田文夫、雜賀清二郎、小泉繁昌、田部庫吉の五氏
- 永井彌次郎氏死亡の件
- 井上正長博士死亡の件
- 工藤祐藏氏死亡の件
- 長津福太郎氏葬儀費補助の件
- 入院手續、森本清治氏
- 病院訪問、十九件
- 遺骨發送、八島武氏死亡届、十件
- 木下又市氏死亡に關する件
- 大堀篤牧師死亡の件
- 島春平氏葬儀費補助の件
- 岸爲治郎氏葬儀に關する件
- 本田兵衛(ハリー)氏葬儀費補助の件
- 中本文治郎氏療養費補助の件
- 綱野芳太郎氏廢疾による補助の件
- 入院手續、田中鐵之助氏
- 遺骨發送二件、長津福太郎、岸爲治郎兩氏
- 葬儀參加四件

- 二田明氏葬儀に關する件
- 香西幸夫人葬儀に關する件
- 南部清彦氏葬儀費補助の件
- 田中鐵之助氏、國島大五郎氏、佐原秀文氏死亡の件
- 葬式參加三件
- 死亡届八件
- 病院訪問六件
- 三好伊與吉氏葬儀に關する件
- 河本ハツ氏葬儀參加
- 松下捨三郎氏(望齋)葬儀費補助の件
- 遺骨發送佐原秀夫、工藤祐藏兩氏
- 一、共濟部委員會開催すると三回
- 一、追悼會及び墓參會
- 五月二十九日紐育日本人教會にて追悼會(寺崎領事出席)六月卅日墓參會(堀内總領事出席)
- 一、年末慰問
- 各病院、育兒院、刑務所(五十名に金品を贈る)
- 一、寄附金 三百九十二弗
- 内譯 金三百弗故佐藤登作殿(遺產管理人より) 金二十弗故田部庫吉殿(澁川知久滿氏より) 金二十五弗故澤田馬之輔殿(渡邊民三、田宮勝次郎兩氏を経て) 金三十弗紐育日本婦人會、金五弗三記重九殿、金五弗村上靜男殿、金七弗故三好伊與次殿(三好アンナ、北山政行兩氏より)
- 一、高松宮殿下御下賜金の内六十弗

を受け病院、育兒院、刑務所等 其他にある不遇の人五十八名に分贈す

- 一、死亡者人員(最近五ヶ年間)百五十九名

總領事館よりの照會により最近五ヶ年に亘る死亡人名表作製回答す

- 一、病院其他の收容人員(現在)

「病院」肺病十五名、中風二名、肝臟一名、精神病二十六名(内婦人三名)「育兒院」九名「刑務所」六名

●雜事項

- 一、高松宮兩殿下御來紐に際し奉迎會事務を補佐し最善の努力をなす

- 一、昭和六年四月二十三日事務所をジエネラル・モーター・ビルディングより現在の場所に移轉す

- 一、帝室博物館復興翼贊會基金募集額日貨金百二十四圓六十四錢を送金す

- 一、赤十字社ロールコールに参加入會者數六百餘名(總額五百八十九弗九十五仙)

- 一、紐育衛生局長ウキン博士の招に應じミルク・エヂュケーションキヤムペーンに参加す

- 一、排日活動寫真 The Cheat が再び當市バラマウントにて上演されんとする情報に接し調査の結果排

日の目的にあらざることを確む
 一、本會々長草信竹治氏はゼネバに於て開催されたる國際阿片會議に政府顧問として出席の爲め五月二十七日渡歐九月歸米更に休暇を得て渡日、一月歸米す
 一、澁澤子爵薨去の報に接し子爵夫人に對し會長の名義にて弔電を發す。
 一、前理事大堀篤氏死去に際し同未亡人に對し理事會の弔意決議文を送る。

一、前理事冷牟田清氏死去に際し同未亡人に弔電を送る。
 一、修正されたる本會々則及細則を紐育州廳に届出、其譯文を完成す。
 一、帝國總領事館の依頼に依り本會の組織事績、活動範圍等に關する報告を提出す。
 一、石井徳長氏經營のレストラントに惡臭彈を投入せる者あり、日本人共產黨員の惡戯と認め官憲に報告し保護方を依頼す。

滿蒙問題と我權益

【三】

待遇を與へるの權利。

今回の滿洲事變の誘因たる日露大戰に得たる我權益と二十一個條々約が蹂躪されて反古紙同様となつたとは二回に亘つて述べたが、其他に細大數十の條約や協約、附屬條約があるが、左の三條約は前後索聯して重要な條約である。
 日清滿洲善後條約及び附屬條約
 (イ)東三省の主要都市十六を外人の居住及貿易を爲め開放す。
 (ロ)安奉線の經營及改築。
 (ハ)營口奉天安東線に日本居留地を畫定すること。
 (ニ)鴨綠江機木公司の設立及經營
 (ホ)滿鮮國境關稅に關し相互に互惠

滿洲五案件に關する日清協約
 (イ)新民屯、法庫門間の鐵道を敷設する場合は豫め日本と商議すべきこと
 (ロ)大石橋、營口間を滿鐵支線とし營口に延長すること。
 (ハ)撫順及煙臺兩炭坑の採掘權を日本政府に與ふること。
 (ニ)安奉鐵道及滿鐵幹線沿線の鑛務は撫順及煙臺を除き明治四十年東三省督撫が日本國總領事と議定せる大綱に従ひ日支兩國人の合辦とすべきこと。
 (ホ)京奉線を奉天城根に延長すること
 間島に關する日清協約
 (イ)圖們江を滿鮮の國境とすると。

(ロ)龍井村、局子街、頭道溝、百草溝の開放。
 (ハ)圖們江北の墾地に鮮人の居住を承認すること。
 (ニ)圖們北雜居區域内に於ける鮮人所有の土地家屋は清國政府より清國人の財産同様に完全に保護すべきこと及び雜居區域内に産出の米穀は鮮人の運搬を許すと。
 (ホ)長吉鐵道を延長して朝鮮會寧に出る吉會線の敷設を許し一切の辨法は吉長鐵道に一律たるべく開辦の時期は清國政府に於て情況を酌量し日本政府と商議の上之を定むべきこと。
 松岡洋右氏の著書中に「今日の滿蒙の地位は我國に取つては國防上重大なるのみならず國民經濟的生存に缺くべからざるものとなつてゐる、孰れの國にも存立の鍵を握る生命線はある、英國のチブラルター、マルタに於けるが如く、米國のカリビアン海に於けるが如く……」と云つてゐる。
 日本が滿蒙開發の爲め投じた金は十六億八千七百萬圓(昭和五年調査)で、列強投資額は合せて五億五千萬圓であるから、我が投資の三分の一である。支那人自身も何十万人の間が我事業の爲め安らかに生活し得て悦服してゐる。滿鐵が支那人勞働者に支拂つてゐる賃銀丈けでも一千七百万の巨額に達してゐる。其上病院

を建て學校を建て化學研究所を設け衛生の設備等に費してゐるものは千二百萬圓に上つてゐる。最近家永博士は日本協會の懇請に應じてエンヂニヤ俱樂部で滿洲事情を講演した後「現世に天國と地獄を見んとするならば滿洲へ行くと、滿鐵沿線は樂土であり、それ以外の地は焦土である」と云つた。
 以上述べた如く日本が工業國として發達する爲めには原料を滿蒙に仰がねばならぬ關係上羊毛、鐵、木材、石炭其他の事業に多大の勞力と犠牲を拂つて開發して來た、それに日露の役に二十億の金と十萬の生靈を犠牲として獲得したものであるから此の權益を放棄し得ざるは當然である國防上から云つても朝鮮と隣接し且つ露國の如きは兵備を充實し常備軍七十萬を擁し、浦港に十七隻の潜水艦を配置し我國を赤化せんと畫策してゐるのであるから、新設滿洲國を安泰の地位まで築き上げるに助成せねば我國は枕を高くして眠れぬ譯である。
 滿洲の實情を親しく視察した歐米の識者は日本の對滿洲政策を當然の行動として是認してゐる。故意に日本を誣むとする者や利害關係より日本を非難するもの、宣傳に依つて我國の行動が曲解せられつゝあるとは悲しむべきことである。(完)

